

京都外国語大学大学院紀要

言語と文化

第15号

March 2021

Language and Culture

研究論文

自然言語における量化現象
——中国語における数量詞を伴う文の曖昧性の研究…………… 王 楽

日本語と英語における名詞句とその代用表現の
統語的分布と意味的研究…………… 大井 一真

地域日本語教育における日本語ボランティアの協働学習と
その継続のモチベーション…………… 柏木 あい

決定詞の違いによる名詞句の適格性について…………… 福嶋 剛司

ドイツ語における分離話題化構文の生成について
——ハイブリッド分析を中心に…………… 山口 裕太

中国語の“一个样”の用い方及びその日本語訳の特徴の考察…………… 吉野 孝介

京都外国語大学

目 次

研究論文

自然言語における量化現象 ——中国語における数量詞を伴う文の曖昧性の研究	王 楽	1
日本語と英語における名詞句とその代用表現の 統語的分布と意味的研究	大井 一真	17
地域日本語教育における日本語ボランティアの協働学習と その継続のモチベーション	柏木 あい	25
決定詞の違いによる名詞句の適格性について.....	福嶋 剛司	35
ドイツ語における分離話題化構文の生成について ——ハイブリッド分析を中心に	山口 裕太	47
中国語の“一个样”の使い方及びその日本語訳の特徴の考察	吉野 孝介	63
編集後記		81

CONTENTS

Articles

Quantifying phenomena in natural language:
ambiguity of sentences with quantifiers in Chinese Wang Le 1

Remarks on the Study of NPs and their Pro-Forms in English and Japanese Oi Kazuma 17

Collaborative learning by Japanese volunteers and continuing factors
of volunteer participants in community-based Japanese language educations Kashiwagi Ai 25

Well-formedness of Determiner Phrase Fukushima Tsuyoshi 35

Eine Genese von der Split-Topikalisierung in der deutschen Sprache:
hauptsächlich Hybrid-Analyse Yamaguchi Yuta 47

Chinese “一个样” of using the way and of the characteristics
of the Japanese translation Yoshino Kosuke 63

Editor's postscript 81

自然言語における量化現象

中国語における数量詞を伴う文の曖昧性の研究

王 楽

要 旨

自然言語における量化現象 (quantification) は、言語間において表面的な相違が観察されることはあるが、量化そのものは普遍文法の原理に基づき分析されている。生成文法において May (1977) は「数量詞を S に付加せよ (Adjoin Q to S)」と定義される数量詞上昇 (Quantifier Raising) という α 移動 (Move α) 分析を提案した。この理論により英語の分析が行われ量化の実質的、理論的研究は大きな進展を見せた。1980年代にこの研究は、中国語における量化現象を研究対象として分析されるようになった。その中で最も代表的なものは Aoun and Li (1989) によるもので、英語と中国語における数量詞を伴う文の曖昧性を検討するものであった。本研究は、中国語における数量詞を伴う文を数量詞、作用域と値域を基に、複数の数量詞が文に現れた場合の数量詞解釈を言語事実の認定も含めて研究するものである。

1. 序章

世界の言語にはそれぞれ独自の特性があり、語順や変形などの各方面で著しい違いがあるが、これらの言語にも多くの類似性がある。つまり世界中の言語は共通性を持っている。

人々の日常的なコミュニケーションは、語句を組み合わせることで、構造を作るという側面がある。日常的に使う言語とコンピュータプログラムで設定された言語は違い、人々がコミュニケーションを行う時に使う言語は自然言語 (natural language) と呼ばれ、多くの不明瞭なところがある。典型的なものは文の意味解釈における曖昧性である。この中で、文の各構成要素が組み合わせによって異なった意味を持つ現象を構造的な曖昧性という。このような言語構造による文の曖昧性は一般的に各言語の間に現れており、主に PRO による構造的な曖昧さ、一つの文の中に複数の数量詞名詞句によって引き起こされる論理形式の曖昧さ、修飾関係が不明であることによる構造的な曖昧性がある。こうした一連の曖昧性がある文は言語学界において広く注目され、精力的に議論されている。

その中で、数量詞の作用域問題や数量詞の作用域による文の曖昧性は、1970年代から欧米の学者を中心に注目されている。数量詞はこれまで議論された問題の一つであり、数量詞は品詞分類の中で名詞に属しているが、名詞とは明らかに区別されている部分が

ある。例えば、数量詞は特定の人や物事を表現するためには使われず、数量を表現するために用いられる。一つの文に複数の数量詞を使うと、その文は曖昧性が生じやすいと考えられる。また、数量詞には、いくつかのタイプがある。その中で全称記号と存在記号は異なる文の中に異なった特徴を持っている。それと同時に、数量詞の作用域における曖昧性はどのように解釈され、形式的にどのように表現されるかということは、言語学界で議論されている主要な問題の一つである。

同じ時期に、中国の言語学者は主に伝統文法に注目していたが、生成文法という新たな理論の影響を受けた。また、HuangとAoun and Liは、中国語の数量詞を伴う文の曖昧性という現象を扱う上で、数量詞の作用域に注目した。

本研究では、Aoun and Liが中国語の作用域に対して提出した理論を中心に、実際の言語調査の結果とともにさらなる検討を加え、中国語における数量詞を伴う文に影響を与える要素を包括的に考察する。そのうえで、文の構造についてさらなる説明を試みる。

2. 数量詞に関する諸問題

2.1 論理学による数量詞についての検討

数量詞に関しては、中国語の数量詞はclassifierと呼ばれる、人や物事や動作の数の単位を表す単語である。quantifierの特徴があるmeiやmeasure wordであるshouのような形式素はすべて中国語の数量詞に属している。英語の数量詞はquantifierと呼ばれ、every、some、allなどのような具体的な物を指す単語ではなく、数量を示す単語または句をいう。

定義上では、中国語の数量詞は一般的に言語学で定義されている数量詞よりも範囲が広い。その中には、英語のquantifierと同じ特徴を持つ数量詞がある。このような形式素は中国語の数量詞と考えられる。生成文法で検討する数量詞は、classifierではなく、quantifierである。

また、数量詞についての議論では、中国語の「classifier」と英語の「quantifier」が混同されることがある。混同を避けるために、まず中国語と英語の「quantifier」特徴に近い語を分類し、まとめる。

英語では、「quantifier」とは「everyone」や「someone」、「all」のような言葉を指すが、このような語彙は現実世界の具体物を指すものではなく、数量を示す単語または句をいう。また、それらは、全称記号(universal quantifier)と存在記号(existential quantifier)に分けられる。中国語の数量詞(classifier)の中には、これに対応する全称記号と存在記号もあると考えられる。

このうち、全称記号は $\forall$ で表され、論理学においては「 $\forall x$ 」という表現を採用しており、 $\forall x$ は領域のすべての x を表す。

- (1) All cars have wheels.

$\forall x, x=\text{car}, x \text{ has wheels.}$

ここでは、Xが「car」を表す時、すべてのXに対して、「wheelがある」という特徴を持っていることを示している。中国語の全称記号 (universal quantifier) も同じである。

- (2) Suoyou che dou you chelun.

(All cars have wheels)

$\forall x, x=\text{che}, x \text{ you chelun.}$

(2) は (1) に対応する中国語の文である。同じように、Xが「che」を指す時、Xに対して、「chelunを持つ」という条件を成立させることができると解釈されている。

この二つの文からは、中国語の数量詞である「suoyou」と英語の「all」は同じ特徴を持っており、中国語には英語と類似した性質を持つ全称記号が存在すると判断できる。

また、英語と同じ性質を持つ存在記号が中国語にもあると推測される。存在記号は $\exists$ で表され、論理学においては「 $\exists x$ 」という表現を採用しており、 $\exists x$ は領域の中に少なくとも一つの対象 x があることを表している。

- (3) Some teacher went abroad.

$\exists x, x=\text{teacher}, x \text{ went abroad}$

- (4) Mouxie laoshi qu guowai le.

(Some teacher went abroad)

$\exists x, x=\text{laoshi}, x \text{ qu guowai le}$

ここでは、Xが「laoshi」を表す時に、「guowaiという範囲に対して、少なくとも一つのXが存在していて、guowaiに行くという条件が成立する」という意味である。

したがって、上記の例では、中国語の「classifier」は英語の「quantifier」と同じように「liangci」と呼ばれているが、同じ特徴を持つ数量詞とは認められない。しかし、英語の「quantifier」と同じ特徴を持つ中国語の数量詞がある。このような数量詞は中国語の「quantifier」と考えられる。

具体的な英語と中国語の全称記号と存在記号のまとめは表1の通りである。

表1 英語と中国語の全称記号と存在記号

	English 英語	Chinese 中国語
Universal quantifier ∨ 全称記号	every, all, each, any, etc.	mei (毎), suoyou (所 有), zheng (整), yiqie (一 切), zong (总), quan (全), Tiaotiao (条条), jiajia (家家), gege (个个) etc.
Existential quantifier ∃ 存在記号	some, a few, many, a, one, etc.	mouge (某个), yige (一个), youyige (有 一个), mouxie (某些), ji (几)yixie (一些) Shou (首), chang (场), tiao (条) etc.

2.2 英語における数量詞を伴う文と中国語の対訳状況

2.1では、英語と同じ語順の中国語にも全称記号と存在記号があることを検証したが、中国語文の中で、これらの数量詞は中国語の文型などの多方面の影響を受けて、翻訳する時は英語の例文と完全に対応できない。また、中国語では数量詞の種類によって、文に現れる位置にも違いがある。

- (5) a. *Sange ren lai le.
(three men come Asp)
b. Sange ren hui lai.
(three men will come)
c. You sange ren lai le.
(have three men come Asp)
There existed three men that came.
d. Yaoshi sange ren lai...
(if three men came)

Hudson (1986) は、中国語では「someone」と同じような単語はないと指摘している。「someone」の意味に一番近い単語は中国語の存在記号を含む名詞句 *mogeren* (a certain person) または (you) *Yi ge ren* (here is a person) である。実際には、中国語の能動文は主語の前に「you (have)」、「*ruguo* (if)」がある、あるいは文脈がある場合以外は、中国語では一般的に「数詞＋助数詞＋名詞」という形の数量詞を含む名詞句が直接的に主語の位置に現れることは認められない。このため、文の曖昧性を検討する時にも、英語と中国語の対訳状況に注意すべきである。

また、中国語の全称記号と存在記号を含む文との対照によって、中国語で主語の位置にある数量詞は一般的に全称記号であり、存在記号を含む名詞句が中国語文の主語をとれにくいことが窺える。しかし、英語では存在記号を含む名詞句が主語をとる文が文法

的である。この時に中国語の存在記号を含む文を英語に翻訳する時、完全に対応できない場合が多いと考えられる。

中国語の全称記号を主語とする場合

- (6) Suoyou jiaoshi wanshang bixu qu jiaoshi fudao zuoye.
 (All teachers evening have to go classroom tutor homework)
 All teachers have to go to the classroom to tutor their homework in the evening.

例文(6)の中国語の全称記号を含む名詞句は、主語の位置にあっても文は自然的である。翻訳する時も、英語で直接に全称記号を含む名詞句文に訳すことができる。しかし、上記の例文の全称記号を存在記号に置き換えると、中国語の文が不自然になる。

- (7)?Yixie jiaoshi wanshang bixu qu jiaoshi fudao zuoye.
 (Some teachers evening have to go classroom tutor homework)
 Some teachers have to go to the classroom to tutor their homework in the evening.

したがって、存在記号を含む英語の文を中国語に訳す時、完全に対応できない場合が多いと考えられる。以下の存在記号を含む英語の能動文には、対応される中国語の訳文もない。

- (8) Some student recommended every book.
 ?Yixie xuesheng tuijianle meiben shu.
 (you) Yixie xuesheng tuijianle meiben shu.

中国語では存在記号「some student」に対応する名詞句は「数詞＋助数詞＋名詞」という形の名詞句であるが、このような名詞句が主語の位置に現れるのは不自然で、その文の前に「you (have)」を加えると、自然な文になる。

また、中国語の全称記号はいくつかの特徴がある。例文のように、全称記号である数量詞「mei」は主語の位置を占めることができるが、目的語の位置を占めると文が不自然になる。このため、目的語の位置に全称記号を用いる場合、「Mei」を使わずに「suoyou」を使うのが自然である。

- (9) He recommended every book.
 a、?Ta tuijianle meiyibenshu.
 b、Ta tuijianle suoyoudeshu.

以上のように、言語間の数量詞を伴う文の作用域の比較研究において、文の中で用いる数量詞を正しく訳すことも中国語と英語の数量詞を伴う文の曖昧性の研究を展開する前提である。

3. 数量詞を伴う文の曖昧性についての先行研究の再検討

3.1 May (1977) 数量詞上昇理論 (QR)

May (1977) 以前、変形文法は以下の二つの文は同じ深層構造を持つと考えられていた。

(11) John came and left.

(12) John came and John left.

(12) では、主語位置を占めていない John (i.e. left に前置している John) を省略しても、文の意味には何の影響もない。しかし、数量詞を含む名詞句のある文では、主語の位置を占めていない数量詞を含む名詞句は省略できない。

(13) Someone came and left.

(14) Someone came and someone left.

明らかに、(13) と (14) は同じ意味を持つとは考えられない。例文の (13) は「あるところに行ったことがある人がいて、またその人たちはこの場所を離れた。」ことを表している。つまり、(13) の中である場所へ行く人と離れる人は同じ人たちを指すが、しかし、例文の (14) は「一部の人がどこかに行った、また一部の人はある場所を離れた」ことを指し、行く人と離れる人は同じ人とは考えられない。

したがって、例文を通して、数量詞は品詞分類の中で名詞に属しているが、名詞と完全に同じではなく、特に二つ以上の数量詞を含む名詞句が文の中に現れた時、主語の位置を占めていない数量詞を含む名詞句は名詞のように省略してはいけない。

また、英語における、複数の数量詞が現れる文は、(15) に示す英語の文のように、その意味解釈において (16) に示すような曖昧性がある。

(15) Every boy loves a girl.

(16) a. $(\forall x, x=\text{boy}, (\exists y, y=\text{girl}, (x \text{ loves } y)))$

b. $(\exists y, y=\text{girl}, (\forall x, x=\text{boy}, (x \text{ loves } y)))$

(16a) は「すべての少年にはそれぞれ 1 人の愛する女の子がいる」という意味であり、(16b)

は「すべての少年が愛する女性が1人存在する」という意味である。つまり、(15)の文では、*a girl*と表記されているのだから女の子は1人しか存在しないという解釈(= (16b))と、*every boy*の数だけ女の子が複数存在するという解釈(= (16a))があるのである。

May (1977) は (15) から (16a, b) のような解釈を生成するために、「数量詞をSに付加せよ (Adjoin Q to S)」と定義される数量詞上昇 (Quantifier Raising) という α 移動 (Move α) を提案した。

また、中国語の数量詞を伴う文にも英語の数量詞を伴う文と似たような特徴がある。

- (17) a. Zhangsan laile ranhou zoule.
 (Zhangsan came and left)
 b. Zhangsan laile ranhou zhangsan zoule.
 (Zhangsan came and Zhangsan left)
 c. Mouxieren laile ranhou zoule.
 (Someone came and left)
 d. Mouxieren laile ranhou mouxieren zoule.
 (Someone came and someone left)

例文の (17d) では「ある場所に行ったことがある」と「この場所を離れる」人は同じ人たちと認められない。

したがって、中国語は英語と同じSVO言語であり、また、中国語の数量詞を伴う文と英語の特徴と一致している。このため、英語における数量詞の作用域に関する理論にも適用可能なはずである。しかし、Aoun and Li (1989) は、英語における能動文と受動文における数量詞の曖昧性が、中国語では文構造の相違により主語の数量詞の作用域は目的語の数量詞の作用域を超えなければならないという言語事実の説明や、中国語では句構造の制限により英語のような再構成が禁止されているため、英語の数量詞を伴う能動文は曖昧性があるが、中国語の能動文には曖昧性がないと指摘した。

3.2 Aoun and Li 理論の再検討

言語調査により、Aoun and Li (1989) によって提案された理論と言語事実には異なるところがある。このため、これらの理論を再検討すべきである。

まず、英語の例文 (18) を考える。

- (18) a. Someone loves everyone. (ambiguous)
 b. [_{IP} someone_i [_{VP} everyone_j [_{VP} t_i loves t_j]]]

ここでは、someoneは主格をもらうために、IPまで移動し、痕跡である t_i を残す。また、この構造にMayの数量詞上昇を適用すると、目的語位置のeveryoneはVPに付加される。このため、「someone」が「everyone」と「everyone」の痕跡 t_j をC統御する。それと「everyone」も「someone」の痕跡 t_i をC統御することができる。このため、someoneとeveryoneの作用域が交差することになり、作用域原理によりsomeoneとeveryoneはお互いにC統御することになり、この文は曖昧性があると判断することができる。

また、英語の(18)を訳した中国語の文「mougeren xihuan meigeren」には曖昧性があると考えられる。

中国語の主語は、文の内部に生成されると仮定する。この仮定に基づけば、「mougeren」はまず移動し、VPの位置から文のIPの位置に移動し、文の表層構造(19a)を生成する。(19a)の論理形式は(19b)である。

- (19) a. [_{IP} mougeren_i [_{VP} t_i xihuan meigeren]] (ambiguous)
 b. [_{IP} mougeren_i [_{IP} t_i [_{VP} meigeren_j [_{VP} t_i xihuan t_j]]]]

(19b)では、数量詞上昇により、まず「mougeren」が「meigeren」と「meigeren」の痕跡をC統御する。それと「meigren」も「mougeren」の痕跡をC統御することができる。Aoun and Li (1989)の理論により、中国語の文(19)は曖昧性があると考えられる。同時に、例文の(19)は言語事実によって、二つの解釈がある。まずは「mougeren」が特定の人で、この人はすべての人が好きである。この時、「mougeren」の作用域は「meigeren」より広い。一方、(19)は「すべての人にとって、誰かが彼を好きになることがある」と解釈できる。言語事実に基づいて、(19)の例文は曖昧性があると認められる。

しかし、Aoun and Li (1989)は、英語の数量詞を伴う能動文は曖昧性があるが、中国語の数量詞を伴う能動文は曖昧性がないと指摘している。この主張はAoun and Liの理論に基づいて得られた結果とは逆である。

また、Aoun and Li (1989)の理論に基づけば、曖昧性がない文は間違えて曖昧性があると予測される可能性もある。

- (20) a. Shui kanjianle meigeren. (unambiguous)
 (Who saw everyone)
 b. [_{CP} shui_i [_{IP} t_i [_{VP} meigeren_j [_{VP} t_i kanjianle t_j]]]]

(20b)と(19b)の構造は非常に似ている。まず「shui」が「meigren」と「meigeren」の痕跡をC統御する、それと「meigren」も「shui」の痕跡をC統御する。論理構造の分析によって、この文は曖昧性があるが、言語事実によっては、(20)は曖昧性がない。この文は「あ

る人、この人はすべての人を見ました」としか解釈できない。つまり、主語である「shui」の作用域は目的語である「meigeren」の作用域より広い。

Aoun and Li (1989) の理論によって、正しく (19) の中国語の数量詞を伴う文に曖昧性があることが予測できるが、Aoun and Li (1989) は中国語の数量詞を伴う文は曖昧性がないと主張する。また、その理論によると、(20) の曖昧性がない文は曖昧性があると間違って分析されることもある。このため、Aoun and Li (1989) の理論が誤ったところがあることを導いた。

4. 数量詞を伴う中国語における能動文の曖昧性の研究

May (1977) の数量詞上昇理論及び Aoun and Li (1989) の理論に基づいて、数量詞を伴う中国語文をさらに検証した結果、上記の理論は一部の数量詞を伴う中国語の能動文の曖昧性を正しく予測するが、大多数の場合は正しく予測ができていないため、本論文では中国語における数量詞を伴う文の曖昧性について再検討すべきであると考ええる。

4.1 心理状態を表す動詞

心理動詞は人間の主観的な感情的活動と認知活動を表す動詞で、意味特徴と構文機能において独特性がある。Zhao (2007) は心理動詞を用いる中国語の数量詞を伴う能動文は曖昧性があるが、動作を表す動詞を用いる中国語の数量詞を伴う能動文は曖昧性がないと主張する。

また、Aoun and Li (1989) で使われている中国語の例文の「xihuan」は心理状態を表す動詞であり、もう一つの例文「yaoshi lianggeren zhaodao meigexiansuo」の「zhaodao」は動作を表す動詞である。このため、Zhao (2007) の主張に基づいて、心理動詞を用いる例文は曖昧性があり、動作動詞を用いる例文は曖昧性がないと仮定して言語調査を実施した。

4.1.1 言語調査

2019年6月25日、Aoun and Li (1989) の数量詞を伴う中国語の能動文の例文「meigeren dou xihua nyigenvren」について、中国語を母国語とする話者向けの言語調査を実施した。調査の結果は表2のとおりである。

調査結果によると、80人のうち78人が「Meigeren dou xihuan yige nuren」という言葉は「AとBの両方を指すことができる」と回答しており、97.5%を占める。数量詞を伴う中国語の能動文は英語と同じように曖昧性があることを証明できる。つまり、この例文は「すべての少年にはそれぞれ1人の愛する女の子がいる」という意味であり、(2b)は「すべての少年が愛する女の子が1人存在する」という意味もある。

また、動作を表す動詞を用いる例文「yaoshi lianggeren zhaodao meigexiansuo」について、

表 2

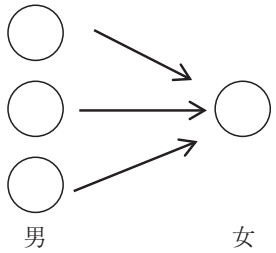
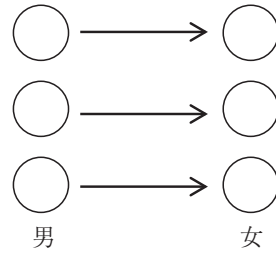
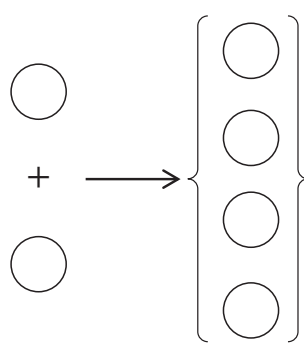
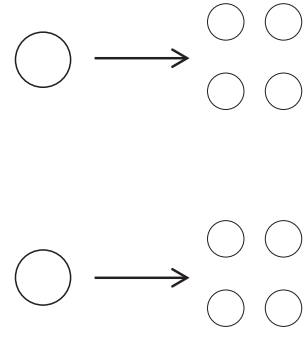
你认为“Meigeren douxihuan yige nuren”这句话可以描述以下哪一种场景 (参与调查80人) 「Meigeren douxihuan yige nuren」という言葉は以下のどの場面を指していますか		
A	B	C
		A 和 B 两种场景都能被描述 A と B の両方を指すことができる
1人	1人	78人

表 3

你认为“(yaoshi) lianggeren zhaodao meigexiansuo”这句话可以描述以下哪一种场景 (参与调查80人) 「(yaoshi) lianggeren zhaodao meigexiansuo」という言葉は以下のどの場面を指していますか		
A	B	C
		A 和 B 两种场景都能被描述 A と B の両方を指すことができる
6人	3人	71人

調査した結果は表3のとおりである。

この例文は「AとBの両方が指すことができる」と回答する人数は心理動詞を含む例文「Meigeren dou xihuan yige nuren」より低い、88.75%の割合を占めているため、この例文にも二つの解釈があると考えられる。

したがって、調査データに基づくと、仮定と一致しないことが分かる。このため、Zhao (2007) 動詞の種類が文の曖昧さに影響を与えるという主張は認められない。また、この調査結果は、Aoun and Li (1989) が中国語の数量詞を伴う能動文に曖昧性がないという主張とは逆である。

4.1.2 例文の分析

また、動詞の種類が文の曖昧さに与える影響をさらに検証するために、本論文はCCLコーパスから心理動詞を用いる中国語の数量詞を伴う能動文と一般動詞を用いる中国語の数量詞を伴う能動文を探し出し、文脈を合わせてさらに検討し分析する。

- (21) Meige xuesheng douhaipa yige shuxue laoshi.
 (Every student is afraid of a math teacher)
 Every student is afraid of a math teacher.

コーパスを検索することによって、例文の(21)二つの文脈が現れる。

- a. Meige xuesheng dou haipa yige shuxuelaoshi,buguan zhege shuxuelaoshi shinan shinv,shi pang shi shou,zhiyao shi jiao shuxue zhege kumu de,jiu zonghui rangren xiangqilai naxienian yinwei zuobuchu shuxueti erbeilaoshi zemade changjing.
 英語訳: Every student is afraid of a math teacher. No matter whether the math teacher is male or female, tall, fat or thin, as long as he teaches this subject, people will always remember the scene that he was scolded by the teacher for failing to solve mathematical problems in those years.
- b. Meige xuesheng dou haipa yige shuxuelaoshi,qiming Linsan,jinguan ta xianzai yijing jinshengwei jiaodaozhuren, dan zhiyao yiti tademingzi, jiu zonghuirang xuesheng juede toupifama.
 英語訳: Every student is afraid of a math teacher, whose name is Lin San. Although he has now been promoted to the teaching director, the mention of his name always makes students feel dizzy.

例文の(21)では、数量詞を伴う中国語の能動文で用いる動詞は心理動詞で、文脈によって、この文は二通りの解釈がある。

- (22) Meige xuesheng douhaipa yige shuxuelaoshi.
 a. ($\forall x, x=xuesheng, (\exists y, y=shuxuelaoshi, (x haipa y))$)
 b. ($\exists y, y=shuxuelaoshi, (\forall x, x=xuesheng, (x haipa y))$)

(22b)では、yigeshuxuelaoshiと表記されているのだからshuxuelaoshiは1人しか存在しないという解釈と、meigexueshengの数だけshuxuelaoshiが複数存在するという解釈(= (22a))がある。また、例文を他の心理動詞に置き換える場合も、同じように作用域が互

に交差する場合がある。

また、心理動詞を他の動詞に置き換えると、例文に曖昧性があるかどうかを考察する。

(23) Suoyou yuangong douchang yishouge.

例文(23)で使う単語は動作を表す動詞で、「歌う」という動作を指す。コーパスを検索することによって、二つの異なる文脈が現れる。

(24) a. Suoyou yuangong douchang yishouge, liuxinggequ yehao, niandaijinqi yeba, zhiyaoshi ziji nashoudege doukeyichang.

英語訳: All employees sing a song, pop or classic, as long as they are good at it.

b. Suoyou yuangong douchang yishouge, zheshouge bianshi womende guoge, xiwang yong gesheng lai biaoshi dui zuguode reai.

英語訳: All employees sing a song, which is our national anthem. We hope to express our love for our motherland by singing.

この例文では、冒頭の文は全部「Suoyou yuangong douchang yishouge」であるが、文脈によって、二つの解釈がある。

(25) Suoyou yuangong douchang yishouge.

(26) a. $(\forall x, x=yuangong, (\exists y, y=ge, (x\ chang\ y))) = (24a)$

b. $(\exists y, y=ge, (\forall x, x=yuangong, (x\ chang\ y))) = (24a)$

このため、文の曖昧性と例文で用いる動詞の種類と関係ないことがさらに証明できる。また、数量詞を伴う能動文は例文の(27)と(28)のような文もある。

(27) Meigeren dou qu mai yiliang zixingche.

Everyone went to buy a bicycle

(28) Suoyou lingdao douzhong yike shu.

All leaders plant a trees.

一部の母語話者は(27)と(28)のような数量詞を伴う能動文は曖昧性がない、 $(\forall x, x=ren, (\exists y, y=zixingche, (x\ mai\ y)))$ と $(\forall x, x=lingdao, (\exists y, y=shu, (x\ zhong\ y)))$ という場合だけが存在すると述べる。つまり、主語の作用域が目的語の作用域よりも広いという解釈しかないのである。

本論文では、曖昧性は文の構造によるもので、文で用いる動詞と名詞の種類とは関係がないと考えている。例文の(27)と(28)のような数量詞を伴う能動文は曖昧性がないと主張するのはほとんどの人が「自転車」が1台しか存在しない、みんなでこの自転車を買いに行きます」と考えることと、「1本の木しか存在しない、どのリーダーもこの1本の木を植える」ということが現実には想像しにくい。つまり、「ある場面が想像されにくい、このため、文は曖昧性がないと主張する」ということである。しかしながら、「ある状況は想像しにくい」ということは、「この状況は存在しない」ということと同じではないため、文の曖昧性が存在するかどうかを判断する理由としては使えないと考えられる。

4.2 「dou」構文

Aoun and Li (1989) が使う中国語の例文「Meigeren dou xihuan yige nuren.」では、これに対訳する英語は「Everyone loves a woman.」であるが、中国語の例文は英語の例文になり単語「dou」があることが明らかとなり、「dou」が用いると中国語の数量詞を伴う能動文に影響を与えるという主張もある。

Zhao (2004) は、中国語の文は、数量詞を含む名詞句が主語の位置に占めるたびに、副詞である「dou」が主語の後についてくるべきであると指摘し、「dou」は中国語の数量詞の作用域においてはある程度役割を果たしていると考えている。

Hou (1983)、Li (1995)、Zhang (1997) は、「dou」は全称記号であると主張する。

4.2.1 構文の分析

Aoun and Li (1989) は数量詞を伴う中国語の能動文を分析する時、文の構造を[_{IP} meigeren dou [_{VP} xihuan yigenvren]]と分析するが、構造における「dou」の役割を検討していない。しかし、「dou」は常に数量詞を伴う中国語の能動文に用いるため、「dou」は全称記号として見られるかどうかということもこの研究で注目される焦点の一つである。

まず、二つの中国語の全称記号を用いる文を考察する。

(29) a. *Suoyoude meige xuesheng xiaode henkaixin.

All every student laughed happily

b. * $\forall X \forall X [xuesheng' (X) \rightarrow kaixin' (X)]$ (Zheng 2009)

(29) の文は二つの全称記号が現れて、文は非文法的である。しかし、その中一つの全称記号を「dou」に言い換えると、文は文法的である。

(30) Suoyou de xuesheng dou xiaode henkaixin.

All the students were laughing happily.

- (31) Meige xuesheng dou xiaode henkaixin.
Every student were laughing happily.

このため、「dou」を全称記号として見てはいけないということが分かる。

Zhao (2007) は、「dou」は全称記号を伴う中国語の能動文だけで現れると指摘し、このとき「dou」は中国語の全称記号と結合して、強い量化特徴を示している。この場合、中国語の数量詞を伴う能動文は主語の作用域が目的語の作用域より広い場合だけがあると指摘している。

本研究では Zhao (2007) の結論は根本的に間違っていると考えられる。まず、Zhao (2007) が使う例文の (32) と (33) を考える。

- (32) *Sange xuesheng dou canjiale yichang yanjiang.
three students attended a speech
(33) *Liangge laoshi dou langsongle yishou gushi
two teachers recited an ancient poem

Zhao (2007) 「dou」は全称記号を主語とする以外の例文に用いられないため、(32) と (33) の文は非文法的であると考ええる。しかし、本研究の2.2によると、ここの例文が非文法的な原因は「数詞＋助数詞＋名詞」が直接的に中国語の能動文の主語位置をとれにくいことで、「dou」と関係ない。また、同じ例文の前に「you」を入れると、例文は文法的な文になれる。

- (34) You sange xuesheng dou canjiale yichang yanjiang.
(have) three students attended a lecture
(35) You liangge laoshi dou langsongle yishou gu shi.
(have) Two teachers recited an ancient poem

「dou」は存在記号を伴う中国語の能動文にも用いられる。

- (36) Youxie xiaobing dou duojin yige dijaolile.
Some soldiers are hiding in a cellar

同じように、「dou」が全称記号を伴う中国語の能動文にも用いられる。

(37) Meige jiaoshi dou chang shouge.

Every teacher sings a songs.

また、上記のすべての例文の「dou」を取り除くと、「dou」を付けた文がもっとも自然であるが、「dou」をつけない文も文法的である。したがって、「dou」を用いるかどうかは、文の曖昧性に影響を与えるとは考えられない。

さらに、4.1.1による言語調査では、Aoun and Li (1989) が使う例文「Meigeren dou xihuan yige nuren」の主語「Meigeren」は全称記号であり、また「dou」を含んでいることが分かるが、言語調査の結果、この例文は曖昧性があることが確認される。しかし、「dou」を用いていない例文「yaoshi lianggeren zhaodao meigexiansuo」もある。言語調査の結果によって、この文にも曖昧性があることが分かる。

このため、「dou」は全称記号ではないことが窺える。しかし、Aoun and Li (1989) では、「Meigeren dou xihuan yige nuren.」に対応する英語の表記は、「dou」が全称記号である「all」に表記されている。この表記は「dou」を直接的に全称記号として認識されやすく、中国語の数量詞を伴う能動文の意味を正確に把握するのは難しい。誤解を避けるため、「dou」の特徴について説明する必要があると考えられる。

上述のように、Aoun and Liの理論によって得られた結果は言語事実と一致しないところが多く、中国語の数量詞を伴う能動文に完全に適用できないことが分かる。中国語の数量詞を伴う能動文については、言語調査と例文の分析によって、動詞の種類と中国語の数量詞を伴う能動文の曖昧性は関係ないと考えられる。また「dou」は全称記号ではなく、文の曖昧性に影響を与えるとは考えられない。そのため、普遍文法における量化の原理は、過去に分析されてきたものでは不十分であり、中国語というヨーロッパ言語とは異なる言語からの分析により、より説明力の高い原理を追求すべきである。

参考文献

- 何元建 (2011)《現代汉语生成语法》北京大学出版社
- 徐烈炯 (2019)《生成语法理论：标准理论到最简方案》上海教育出版社
- 赵 娜 (2007)《中英全称量词辖域歧义问题》湖南：湖南大学
- 郑美霞 (2009)《汉语中“都”算子的特征》河南新乡：河南师范大学
- 岸本秀樹 (2018)『ベーシック生成文法』ひつじ書房
- 小野隆啓・安藤貞雄 (1993)『生成文法用語辞典』大修館書店
- 小野隆啓 (2015)『英語の構造——その奥に潜む原理』金星堂
- Aoun, Joseph and Yen-Hui A. Li. (1989) Constituency and Scope. *Linguistic Inquiry* 20: 141-172.

- Aoun, Joseph and Yen-Hui A. Li. (1993) *Syntax of Scope*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Chomsky, Noam, 满在江 麦涛 (译) *The Minimalist Program* (2017) 外语教学与研究出版社
- Kuno, S., K. Takami and Y. R. Wu. (1999) Quantifier Scope in English, Chinese, Japanese. *Language* 75: 63-111.
- Hornstein, Norbert. (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism*. Oxford: Blackwell.
- Huang, C-T. James, Y.-H. Audrey Li, and Yafei Li 张和友 (译) (2013) *The Syntax of Chinese* 世界图书出版公司
- Hudson, W. (1986) *Predication Operators and Licensing of Indefiniteness*. University of Southern California, Los Angeles.
- Li, J. (1995) Dou and wh-questions in Mandarin Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 4: 313-323.
- May, Robert. (1977) *The Grammar of Quantification*. Ph.D. dissertation, MIT.
- May, Robert. (1985) *Logical Form: Its Structure and Derivation*. Ph.D. dissertation, MIT.

日本語と英語における名詞句とその代用表現の 統語的分布と意味的研究

大井 一真

要 旨

日本語と英語という自然言語における名詞句、照応形、代名詞の指示対象の統語分布や意味の側面について、生成統語論中の理論を用いた分析をRadford (2009)、三原・平岩 (2006)などを基礎に、PROや*pro*、また束縛理論において英語の再帰照応形や日本語の「自分」の統語分布とその制約を議論する。

1. 序論

本稿では日本語と英語に見られる名詞句とその代用表現について概観する。たとえば、以下のような文を考察してみよう。

- (1) John forced the man to leave the room.

上の文では、部屋を去ることを強いられたのはthe manであるが、(1)は(2b)ではなく(2a)のような構造を持っているとされる。

- (2) a. John forced the man_i [PRO_i to leave the room].
b. John forced [the man to leave the room].

to不定詞節の主語は実際の発話では音形を持たない要素であるPROである。(2b)の場合では、PROはthe manを指示している。

以上は不定詞節であったが、イタリア語のような言語では定形節であっても代名詞は省略できるという。このような言語を*pro*脱落言語という。これが可能なのは、主語と動詞の一致現象が豊かであるからであり、動詞の形態をみれば主語が特定可能だからである。これは2節でみる。

また、英語の再帰代名詞を用いた表現では、(3a)は適格文であるが、(3b)は非文である。

- (3) a. John hates himself.
b. *Himself hates John.

これは himself のような照応形は人称、性、数、といういわゆる ϕ 素性において一致する先行詞の機能を果たす語が必要である。(3a) ではそれは John という語がその役割を果たしているので適格文であるが、(3b) では先行詞として機能し得る語がない。John という語が一見、その役割を果たせそうではあるが、実際は非文である。では、前に先行詞と取れそうな語句があれば可能かという、(4) で示すようにそうはならない。

- (4) *John believes that himself was innocent.

また、日本語の代名詞の指示について考える。

- (5) a. *太郎_iは彼_iを過大評価している。
b. 太郎_iは花子が彼_iを過大評価していると思った。(三原・平岩 2006: 32)

(5a) の文中の「彼」は同文中の「太郎」を指示する解釈はないが、(5b) ではその解釈も可能である。

John や book のようにそれ自身が指示性を有する表現を指示表現 (Reference Expression) という。また先行詞の存在によって指示が決定されるものに代名詞と照応形がある。後者の照応形には、さらに「自分自身」「彼自身」などの再帰形と「お互いの」である相互照応形がある。

以下、2 節では日本語と英語における PRO と *pro* についてその特性を議論する。3 節では、束縛理論をみる。さらに同節で日本語の「自分(自身)の」について考える。

2. 定形節と非定形節の主語

言語には空範疇 (empty category: *e*) と呼ばれる要素が存在する。それは文法や意味特性は有しているが音形を欠いている要素である。したがって、現実の発話では聴こえない要素である。

2.1 イタリア語における *pro* の諸例

たとえば、Radford (2009: 92) より、以下のイタリア語の対話の例を考察してみる。

- (1) SPEAKER A: Maria è tornata?
 Maria is returned? ('Has Maria returned?')
 SPEAKER B: Sì, *pro* è tornata
 Yes, *pro* is returned ('Yes, she has returned')

*pro*は音形をもたない空の定形節 (finite clause) の主語代名詞である。*pro*を想定する理由としては、(1B)の文は暗黙の主語があるという直感を捉えているからである。また *è* という助動詞と分詞である *tornata* が、(1A)の *Maria* という主語がある文と同様に形態上的一致が見られるという理由から *pro*を想定している。以上のことから、*pro*には音形は持たないが、文法特徴と意味特徴は持っていると考えられるのである。

また、Radford (2009: 93) の例から (2) にみられる英語にも、イタリア語のように定形節に空範疇が自由に生じるわけではないが、命令文には *you* に相当するものがあると考えられている。

- (2) a. Don't lose your nerve!
 b. *Don't lose their nerve!

さらに、(3) の再帰照応形の例からも分かるように、命令文中の主語は聞き手である *you* と分かる。

- (3) a. Behave *yourself*/**himself*/**herself*/**myself*. (行儀よくしたまえ)
 b. Use *your own* comb. (自分自身の櫛^{くし}を使え) (安藤 2005: 876)

また、Radford (2009: 93) によれば口語の英語の場合、本来であれば定形節に生じる主語が省略される場合があるという¹⁾。

- (4) a. I can't find my pen
 b. I think I left it at home
 c. Why do I always lose things?
 (5) a. Can't find my pen
 b. Think I left it at home/ *Think left it at home
 c. *Why do always lose things?

1) 事情は異なるが英語の歴史を遡れば、主語の生じない定形節は非人称動詞 (Impersonal verb) で見ることができる。石橋 [編] (1966: 479-480) によると、happen, appear, please などは非人称動詞であった。その名残りとして、as follows, methinks, as regards, as concerns などがあるという。

以上の *pro* は定形節に生じるものだが、不定詞節 (nonfinite clause) にも音形のない、つまり聴こえない主語はあるとされる。*pro* (little *pro*) と区別するために PRO (big PRO と読む) と表記される。

- (6) a. We would like [*you* to stay]
 b. We would like [to stay] (Radford 2009: 94)
 (7) [_{TP} We would [_{VP} like] [_{TP} you/PRO to stay]]] (*op. cit.*, p.95)

(6) を PRO を用いて表記すると (7) のようになる²⁾。PRO は主節の *we* を指示し、‘We would like *ourselves* to stay’ と同様の解釈を持つ。つまり *we* は PRO のコントローラー、もしくは先行詞である。*like* のような PRO を有する不定詞節³⁾ を補部 (complement) に許す動詞をコントロール動詞 (control verb) と、またその不定詞節をコントロール節という。また PRO にはコントローラーによっていくつか種類が認められる。

- (8) a. It’s vital [PRO to prepare *myself* properly for the exam]
 b. It’s important [PRO not to take *oneself* too seriously]
 c. John didn’ t want [PRO to get *themselves* into trouble]
 d. John proposed [PRO to become *partners*]
 e. John wanted PRO [to work *together*] (Radford 2009: 96)

(8a) の PRO はこの文の発話者である。したがってこの PRO は1人称・単数の主語である I であるから *myself* の先行詞として機能し得る。PRO が談話内に存在するが文内にはない存在物を指示する場合、談話コントローラー (discourse controller) という。(8b) の PRO は恣意的指示 (arbitrary reference) があるという。(8c-e) は PRO は3人称複数の主語であり、*John* に部分的にコントロールされている。

2.2 日本語における *pro*

次に、これに類似した日本語の現象について概観する。三原・平岩 (2006: 27) によれば、日本語は文脈上自明な要素を省略できるとあり、話者を示す語や先行文脈から分かる要素を言語化しないことも多いという。

- (9) A: 昨日、__テレビで『タイタニック』を観たよ。
 B: ああ、僕も__観たよ。 (*ibid.*)

2) Radford (2009: 94) では樹形図だが、ここでは標示付き括弧に表記を改変した。

3) 一般の学習英文法ではこれらは節の扱いをしない。生成文法の考え方を取り入れた英文法書については中村 (2009) を、また節の説明については中村 (2009: 3) を参照。

しかし、もし何も要素がなければ、項構造である [AG, PAT] では付与されないままになってしまう。そのままでは θ 基準違反になってしまう。

また、(10) の「自分」という語の振る舞いを考えれば、そこにはなんらかの要素が存在するとみた方がよい。

- (10) a. [太郎の家に行くと]、[いつも自分の部屋で勉強している]。
 b. [太郎_iの家に行くと]、[pro_iいつも自分_iの部屋で勉強している]。

なぜなら、「自分」は「太郎」と同一指示であるが、「自分」という語は同じ節内に先行詞を本来必要とするが、同じ節内に先行詞は見当たらない。これを解決するには (10b) のように言語化されない主語代名詞 (pro) を設定し、これが「自分」の先行詞として機能していると考えることである。このように音形をとらない代名詞をゼロ代名詞といい、繰り返しになるが、pro と表記される⁴⁾。

3. 束縛理論概観

次に、既に少し触れてはいるが、束縛理論 (Binding Theory) について概観する。これは束縛条件から成り、次のようなものである。

- (1) 束縛条件 (Binding Condition: BC)⁵⁾
- (A) 照応形は最小の TP 内で先行詞に束縛されていなければならない。
 (B) 代名詞は最小の TP 内で先行詞に束縛されてはいけない。
 (C) 指示表現は束縛されてはいけない。
- (2) a. [TP 太郎_iは自分自身_iを過大評価している]。
 b. *[TP 太郎は [TP 花子が自分自身を過大評価している] と思った]。⁶⁾
- (3) a. *[TP 太郎_iは彼_iを過大評価している]。
 b. [TP 太郎_iは [TP 花子が彼_iを過大評価している] と思った]。
- (4) a. *[TP 太郎_iは太郎_iを過大評価している]。
 b. *[TP 太郎_iは [TP 花子が太郎_iを過大評価している] と思った]。

4) 以上、三原・平岩 (2006: 28) による。

5) 原理変数理論では最小の TP ではなく統率範疇である。ここではミニマリストプログラムの場合でみていく。

6) 1 (3) から、BC (A) が機能しているのは分かる。では Synge (1907) から引用する次の下線部分は、事情は異なるかもしれないが、どのように考えればよいだろうか (下線、筆者による)。

Amn't I after saying it is himself has me destroyed, and he a liar on walls, a talker of folly, a man you'd see stretched the half of the day in the brown ferns with his belly to the sun.

(1) の諸条件は (2) – (4) においてそれぞれ機能する。以下では、特に、日本語の「自分」という語について概観する。

三原・平岩 (2006: 65) によると、再帰照応形「自分自身」は伝統的には「自分」という語を用いて BC (A) の検証がなされてきたという。さらに (5) と (6) が「自分」の基本的な特質である。

(5) c 統御条件

- a. 太郎_iは自分_iの性格を嫌っている。
- b. *[太郎_iの父親]は自分_iの性格を嫌っている。

(6) 主語先行詞条件 (Subject Antecedent Condition : SAC)

- a. 太郎_iは花子から自分_iの財布を受け取った。
- b. *太郎は花子_jから自分_jの財布を受け取った。

(5a) は「太郎」が「自分」を c 統御しているが、(5b) ではしていない。したがって、同一指示の解釈が得られる場合とそうでない場合がある。(6) は「自分」という照応形の先行詞は主語でなければならないというものである。

次の例では、先行詞と照応形が別の節に存在している。

(7) 長距離束縛

[太郎_iは[花子_jが自分_{ij}の性格を嫌っている]と思っている]。

(7) は先行詞が同一節内にあり、束縛される場合 (花子) と別の節内にある場合 (太郎) の 2 つの可能性がある。前者を短距離束縛 (Short Distance Binding) といい、後者を長距離束縛 (Long Distance Binding) という⁷⁾。

3.1 照応形「自分」について

照応形「自分」と視点について概観する。(8) の各文は先行詞に相当するものが文中に存在しないのに可能であるという事実がある⁸⁾。

(8) a. ああ、それは自分が書いたものです。

- b. [彼は[自分_iが、年の割には物を知った気のきいた人間だ]と思っていた]。
それなのに、何故、自分₂は彼女の存在を許すことが出来ないのだろう。

(三原・平岩 2006: 65)

7) 以上、三原・平岩 (2006: 64–65) による。

8) (8b) の括弧は筆者による。

(8a)の「自分」は発話者が自身を指している。(8b)において、「自分₁」は「彼」に長距離束縛されているとみることも可能かもしれないが、「自分₂」を説明することはできない。三原・平岩(2006: 66)によると、文において表現される内容は話者、や主語の視点から描写されるのが通常であるという。これを捉えようとするのが視点(Point of View)という概念である。

視点という概念を用いて、次の例文の下線部分を考察する⁹⁾。

(9) 母は自分の子どもを愛している。¹⁰⁾

(10) 自分のペンを取って。

(11) そうすることで、彼は自分の立場を弁護していることになる (安藤 2005: 119)

(12) 私は自分が恋しかけているのを感じた (*op. cit.*, p.827)

(9)では、同一節内にある母を指す解釈と話し手を指す解釈がある。(10)では聞き手と話し手の解釈が存在する。(11)、(12)では主語が先行詞として解釈される。

4. 結語

本稿では、空範疇の特性、また日本語と英語における束縛理論、特にBC(A)をみた。2節ではイタリア語のようなロマンス諸語の主語代名詞位置において*pro*が生起し得ることをみた。また、英語において、不定詞節において目には見えない、伝統文法では意味上の主語と呼ばれている、PROをみた。さらに日本語においても θ 基準の観点からその存在を傍証した。3節では、日本語の「自分」という照応形をみた。この照応形は長距離束縛、短距離束縛によって先行詞に束縛されているのをみた。さらに、これでは説明できない現象を捉えるために、視点という概念を導入した。これによって先行詞が一見存在しないように見える文でも正しく説明できることをみた。

参考文献

- Carnie, Andrew., (2013), *Syntax A Generative Introduction Third Edition*, WILEY-BLACKWELL.
 Chomsky, Noam., (1981), *Lectures on Government and Binding*, Foris.
 Cowper, Elizabeth., (1992), *A Concise Introduction to Syntactic Theory: The Government-Binding Approach*, Chicago.
 Radford, Andrew., (1988), *Transformational Grammar: A First Course*, Cambridge.

9) (10)、(11)は筆者による作例。また(9)は2.1(3)の英文と比較せよ。

10) 関西方言において、聞き手を指す場合の「自分」という解釈はこの文だと無理だという。

- Radford, Andrew., (2009), *Analysing English Sentences: A Minimalist Approach*, Cambridge.
- Synge, J. M., (1907), *The Playboy of the Western World ACT II*.
- 安藤貞雄 (2005)『現代英文法講義』開拓社.
- 安藤貞雄・小野隆啓 (1993)『生成文法用語辞典』大修館書店.
- 石橋幸太郎 [編者代表] (1966)『英語語法大事典』大修館書店.
- 小野隆啓 (1991)『英語の輪郭——原理変数理論解説——』英潮社.
- 久野暲 (1983)『新日本文法研究』大修館書店.
- 中村捷 (2009)『実例解説英文法』開拓社.
- 原口庄輔・中村捷・金子義明 (2016)『増補版 チョムスキー理論辞典』研究社.
- 細江逸記 (1973)『英文法汎論 改訂新版』篠崎書林.
- 細江逸記 (1973)『動詞時制の研究〔新版〕』篠崎書林.
- 三原健一・平岩健 (2006)『新日本語の統語構造 ミニマリストプログラムとその応用』松柏社.

地域日本語教育における日本語ボランティアの 協働学習とその継続のモチベーション

柏木 あい

要 旨

年々増加する在留外国人に伴い、全国各地で地域日本語教室の数や規模が拡大している。しかし、日本語学習支援者である日本語ボランティアの数は不足している。日本語学習支援者がボランティア活動に参加し継続していくには、日本語学習支援者同士が意見を出し合い、学び合い、成長していくことが大切だと言えるが、その方法については先行研究で論じられていない。本稿では、地域日本語教室での実践をもとに、日本語ボランティアの協働学習の方法について述べ、分析した。協働学習を行うことが日本語ボランティア不足を解消することに結びつくと主張する。

1. はじめに

日本語教育の一つに、地域日本語教育というものがある。日本語学校や大学で勉強するのではなく、日本で生活する外国人、日本語非母語話者が住んでいるその場所で、日本語を学ぶことである。一緒に勉強するのは、日本語教育に従事する日本語教師だけではなく、その地域で生活している日本語母語話者だ。テキスト通りに学ぶこともあれば、会話を通して学んだり、日本文化を経験する活動などのアクティビティを通して学んだりすることもあるのが地域日本語教育の特徴である。いわゆるボランティア活動の一種だ。

全国各地に存在する地域日本語教室は、年々増加する外国人住民に伴い、拡大してきた。法務省によると、2008年に214万4,682人だった在留外国人も、2019年12月末現在では293万3,137人に上る。技能実習生の数の伸びが特に大きく、2008年は8万9,033人であったのに対し、現在は41万902人である（厚生労働省 2019年12月末）。そこで、求められるのが地域日本語教育であるが、地域日本語教育のシステムそのものや、日本語専門家、コーディネーターとの関わり方など多くの議論を呼び起こしている中、日本語学習支援者である日本語ボランティアを確保する方法について、これまであまり注意が向けられてこなかった。日本語学習支援者としてボランティア活動に参加することは、養成講座を受講しなければならなかったり、継続しなければならなかったりと、一般的なボランティア活動よりハードルが高いとされており、なかなか一步を踏み出せない人や、一度、足を踏み入れてもすぐに辞めてしまう人が多い。それゆえ、川田 (2019) で述べ

られている通り、地域日本語教室の拡大とともに、日本語ボランティア不足が問題となっている。学習者の数に対して、日本語ボランティアの数が十分でなければ、活動を思うようにできず、運営が滞る可能性もある。そこで、本稿では、筆者が参加している教室での実践結果の分析をもとに、日本語学習支援者同士の協働学習と活動が続けるモチベーションの保ち方について言及する。それによって、日本語ボランティアが活動に参加し、継続し、日本語ボランティアの数を確保できるかを分析する。

2. 先行研究

地域日本語教育に対する先行研究は数多く存在する。その中でも、今回は、日本語学習支援者に着目しているものを取り上げる。日本語学習支援者という言葉は、文化庁が地域における日本語教育に携わるボランティアの人々を指す言葉として使用している。しかし、日本語ボランティア、日本語指導ボランティアなどその呼称はそれぞれ教室によって異なる。

山辺(2011)は、地域日本語教室を「居場所」と感じられるところにしていかなければならないと述べている。この「居場所」は、学習者が受け入れられ、自分を表現できる場所としているが、筆者は、学習支援者も同様ではないかと考える。山辺は、日本語ボランティア養成講座で、定年退職者や主婦、学生などの様々な背景を持つ人たちが対等に意見を交換することで人間関係を深めていくことを学び、実際の地域日本語教室で多様な人々との人間関係の心地よさや、大切さに気づき活動に役立てていくべきだと教えている。もちろん、それも大切だが、日本語学習支援者は養成講座に留まらず、その後も相互に意見を交換し合うことで、学習者だけでなく日本語学習支援者達も地域日本語教室を「居場所」と感じられるのではないだろうか。

小島(2014)は、日本語ボランティアの人材確保のために、日本語ボランティアに参加する動機をインタビューから分析した。ボランティア活動への参加に必要なのは、①自発性、②社会性、③非営利性、④先駆性(興梠 2003、池田 2006他)、⑤自己成長性、⑥継続性(新崎 2018)である。この中でも、小島は、日本語ボランティアは特に⑤自己成長性、⑥継続性が重要であると述べている。日本語学習には、学習者の学習継続が必要である。それゆえ、ボランティアも継続して支援し続ける必要がある。そして、継続して参加するためには、自己成長という報酬を明示することが有用であると結論づけた。無償というのがボランティアの前提であるが、やはり人は、何かしら見返りを求めてしまう傾向がある。しかしながら、自己成長という報酬を明示する方法は記されておらず、分析したままになっており、人材確保に繋がらない。論文中のAさんへのインタビュー(p.105-107)から分かるように、仲間同士学び合うことが参加の継続の鍵となるので、学び合う場を設けることで人材確保に繋がるのではないだろうか。

高野(2017)では、地域日本語教育ではないが、留学生を支援する男性日本語ボランティアについて述べている。日本語ボランティアに28名が登録しても、20名はすぐに辞めてしまっている現状がある。8年以上継続して参加していることが人は、本人はもちろん、第三者の授業担当教員からでも分かるくらいに日本語ボランティアとしての振る舞いが成長していった。この論文では、この変化の仕方を論じているが、最初は上手に活動できず、辞めてしまう人も多いが、成長していくことで続けられるという点は、地域日本語教育の日本語ボランティアの人材確保に応用できるのではないだろうか。

これらの先行研究より、日本語学習支援者がボランティア活動に参加し継続していくには、日本語学習支援者同士が意見を出し合い、学び合い、成長していくことが大切だと言える。自己成長性を感じることで、ボランティア活動に継続的に参加することができている。しかしながら、そのように感じるための方法が先行研究では見出せていない。活動していく中で自己成長を感じることも一つではあるが、それでは、自己成長を感じるまでに時間がかかり、感じる回数も限られてくる。日本語学習支援者が意見を出し合い、学び合い、成長していくことができる場を新たに設けることで人材確保できるのではないだろうか。

3. 協働学習の実践

3. では筆者が所属するB地域日本語教室での実践の分析を例に、協働学習の方法について述べる。この協働学習は、先行研究より考えられる人材確保の方法である。地域日本語教育における従来のブラッシュアップ講座は、日本語教育能力をスキルアップさせるためのものであり、専門家より講義型で行われてきた(俵山ほか 2017)。今回、提案するのは、日本語学習支援者同士の学びを大切にしたい協働学習である。

3.1 実践対象

筆者は、大阪府下で活動している「B地域日本語教室」に日本語学習支援者と教室運営メンバーとして参加している。このB地域日本語教室は2018年10月に立ち上げられた団体だ。B市では国際交流協会が地域日本語教室を1993年から運営していたが、2018年9月末にその活動を終了し、それを引き継ぐ形で新たな自治団体が活動を開始した。2017年から活動に参加している筆者は、新組織の立ち上げに携わり、今もなお、12人の運営メンバーとともに組織作りを行っている。

B地域日本語教室では、新規の少人数レッスン希望者が毎月4名程度、おしゃべり広場(毎週土曜日に学習者と学習支援者が自由に会話できる時間)参加者が5名程度申し込みに来る。既存の日本語学習者は少人数レッスンが33組71人、おしゃべり広場の参加が毎回15~20人程度(2019年12月現在)である。つまり、この人数に対応できる日本語

学習支援者である日本語ボランティアが必要だ。少人数レッスンやおしゃべり広場だけでなく、運営に必要な事務作業やイベントの企画・運営等にもボランティアが必要である。

3.2 事前インタビュー

実際に活動している日本語学習支援者が、ボランティア活動を続ける理由は何なのか、先行研究の自己成長がB地域日本語教室で活動する日本語ボランティアにとってどれほど大切なのかを知るために、事前にインタビューを行った。表2でインタビュー対象者7名(C～I)のプロフィールを示す。インタビューはプライバシーが保たれる部屋で行い、録音し文字化した。それぞれ20分程度、半構造化インタビューで行った。

表1 インタビュー対象者

	性別	年齢	ボランティア期間	インタビュー日
C	女性	60代	2004年から	2019.8.3
D	女性	60代	1993年から	2019.8.3
E	女性	60代	2000年から	2019.8.3
F	女性	60代	2008年から	2019.9.21
G	女性	60代	2013年から	2019.9.21
H	女性	50代	2007年から	2019.9.28
I	女性	40代	2007年から	2019.9.27

筆者の「活動をしていて、楽しいことややりがいを感じることは何ですか。」という質問から以下の答えを聞くことができた。

D：多文化を知れること。あと、日本語の再確認。

E：自分の知らないことを知れることとか。相手の文化とか。日本についてもだし、世界についても新聞とかで今まで以上に見るようになって。勉強できることやね。

F：日本語ですね。国語の先生してたのに、全然わからなくて。でも学習者の人と一緒に勉強して色々知れて、あー、面白いなって思います。

G：普段何気なく使っている日本語について深く考えるようになりました。それと、メディアなどを通さない生の生活や情報を得られたことは良かったことだなと思います。

H：外国人とのふれ合いです。日本とは違う文化や考え方などを知ることができることと、自分の母国語を教えるという初めての体験を通じて人にわかってもらうにはどんな風に説明すればいいのか毎日勉強になること。

I：外国の人たちと日本語でおしゃべりできること！相手の国の文化や生活習慣などを知ることができる。

インタビューの回答では、勉強になることという意見が多く見受けられた。日本語や相手の文化、世界の情勢など、知らないことを知ることに喜びを感じている。また、勉強することを面白いと感じている。その楽しさが、向上心に繋がり、自分で積極的に新聞やニュースから情報を仕入れたり、日本語教育文法について勉強を始めた人なども少なくない。以上のことより、B地域日本語教室でも先行研究同様、自己成長を体感できることがボランティアを続けられる要因であると言える。

- C：国に帰った子で今でも連絡し合うくらい仲良くなれたこと。やっぱり頼ってもらえることが嬉しいかな。
- D：あ、それと、私は子供見てるから他の人以上に成長感じられるし、それが嬉しいかな。
- H：おしゃべりで話が通じるととても喜んでもらえて嬉しいことかな。
- I：少しでも日本でくらす外国人の役に立てているのではと実感できること。とにかく楽しい。

また、役立っている実感が嬉しいという意見もあった。実際に役立ったのを体感し、自分の行為が実を結んだと実感できることで、役に立ちたいという気持ちを、自己実現させている。自己実現することによって、満たされていると感じているのだ。頼ってもらえたり、学習者の喜びであったり、直接他人から与えられるものはより嬉しく感じ、次へと繋がっていく。これらの自己実現も、言い換えると自己成長したから役に立つことができ、自己実現できたということであり、ボランティアをする要因の一つであると言える。

3.3 概要

先行研究と事前インタビューを踏まえて、現在活動に参加している日本語学習支援者と、活動に参加しようとしている日本語ボランティアに自己成長を感じてもらい、継続して積極的に活動に参加してもらうために、日本語学習支援者同士で学び合える協働学習（以下、自主学習会）を企画した。

表2 自主学習会スケジュール

2019年 8 月 3 日 (土)	第 1 回自主学習会	日本語の授業とは？
2019年 8 月 24 日 (土)	第 2 回自主学習会	動詞ってなに？
2019年 9 月 28 日 (土)	第 3 回自主学習会	質問の答え方
2019年 10 月 26 日 (土)	第 4 回自主学習会	助詞ってなに？

4. 結果と分析

4.1 協働学習の内容と感想からの分析

各自主学習会終了後に、感想などを自由に記述してもらった。本章では各自主学習会の内容と感想を基に、協働学習ができているかを分析する。

第1回自主学習会

第1回自主学習会は、1人が教師役、6人が生徒役として参加し、模擬授業を行った。残りの参加者は近くで見学した。参加者は全部で13人。教材は「みんなの日本語初級1」を用い、12課の比較の部分を導入・練習した。ボランティア活動に日本語学習支援者としてまだ参加していない人にとっては、初めて見る日本語の授業になり、実際の授業をイメージするのに役立ててもらった。すでに活躍している日本語学習支援者の中にも、レッスンのやり方が分からず、会話のみになっているクラスがあったので、そのクラスの人にとっては、日本語の授業を知る機会になった。20分程、授業した後、教え方について、改善点を出し合った。

感想では、活動にまだ参加していない日本語ボランティアから、実際の日本語学習支援者の授業様子を見ることで様子を知ることができイメージできたと回答があった。これは、コーディネーターなどの日本語専門家から、こういう風に教えましょうと教えられる場合と異なり、身近なボランティア同士だから、未経験でも疑問点を相手に伝えることができる。正解を専門家に突きつけられないからこそ、一つの答えに縛られず、意見が飛び交い、教える、教わるという関係性がないから、お互いに意見が言いやすく、お互いの成長に繋がる協働学習であると考えられる。また、すでに活躍されている日本語学習支援者からは、自分のレッスンと比較できたり、それを自分のレッスンと融合したりできたという回答があり、日本語学習支援者同士だからこそその学習ができた。

第2回自主学習会

第2回自主学習会では、動詞の活用を中心に勉強した。この回は2回に分けて行ったため、1回目の参加者が11人、2回目の参加者は7人だった。動詞には普通形と丁寧形では形が違ふことや、過去形、否定形などを穴埋め式のワークシートで書いてもらい活用するという事実を再確認した。同時に、名詞とい形容詞、な形容詞も活用することを比較しながら確認した。その後、辞書形やて形、た形という名前を再確認し、それらの作り方を考えてもらった。近くの人と相談しながら、何も見ずに答えを考えてもらい、一定時間経過後に回答を聞きだしながら、筆者がホワイトボードを用い解説した。この自主学習会は、参加型というより、講義型の学習会になってしまい、協働学習が他の会よりできなかった。ただ、近くの人と意見交換したり、筆者も一日本語ボランティアであったりという点では、協働学習であったと言える。

感想では、勉強になった、もっと学びたいと思ったというような意見が多かった。日本語教育の知識を身につけることは、自己成長にも繋がり、学習者に教えられる範囲が広まることで、頼られる存在になるという自己実現ができる。協働学習という点では、他の学習会より劣るが、自己成長をすることで、日本語ボランティアに必要な要因を満たせたのではないだろうか。また、実際、この回の終了後、日本語学関連の本の貸出が増えたり、レッスン時間外に日本語学を勉強したりする人が以前より多く見受けられるようになった。

第3回自主学習会

第3回自主学習会では、学習者からの質問の答え方を題材として取り扱った。参加人数は16人と一番多かった。「Aさんは学生です。」「Aさんが学生です。」の違いは何ですかなどという学習者がしそうな質問を提示し、4人1組あるいは5人1組のグループで回答を考えてもらった。一つの質問につき5～10分程度考える時間を取り、その後、グループごとに発表してもらった。発表は学習者に説明するように、もしくは、どのように違うと考えたのかという意見を共有してもらった。発表内容に対して、全体で賛成反対や改善点などを自由に発話してもらい、次の発表に行くのを繰り返した。一つの質問が終われば、次の質問へ行き、また、グループ内で答えを考えてもらった。このグループワーク形式の学習が、一番人と話す時間が長く、一番協働学習ができていたと考えられる。

感想では、普段何気なく使っている日本語をみんなで改めて考えることは、知らないことを知れて面白い機会になったとあった。知ることを面白いと考えている人が多いのは、やはり、自己成長生が日本語ボランティアをする要因の一つであると言える。また、日本語の使い方を説明することの難しさを体感したという意見があった。人に説明することは、人と学ぶからこそできる体験であり、協働学習そのものであると言える。実際に説明してもらった発表形式をとったため、より、本番に近い形で実践でき、学習者側の視点に立つこともできた。それもまた、協働学習という形をとったからこそ結果だ。

第4回自主学習会

4回目の学習会では、助詞について勉強した。この会も2回行い、1回目の参加人数は9人で、2回目の参加人数は3人だった。日本の学校教育で学習する国語文法用語と、日本語教育の文法用語を比較しつつ、助詞の役割は何なのか、格助詞には何があるのかを学んだ。最初に、助詞、格助詞がどういうものかを考え発表し合った。その後、格助詞の意味や用法を、「山を登る」「山に登る」というように、二つずつ格助詞が使われている文を取り出し、考えてもらった。一つ考えたら、みんなで答えあわせをし、次の問題に移るというのを繰り返し行なった。この会も正解がわからない中、みんなで模索し

合い、いい協働学習ができた。

ただ、この回は前回までの感想で次回以降に取り組みたいこととして挙げられていた助詞を学んだが、理解できたが、学習者にどこまで理解してもらう必要があるのか分からないなどといった意見が多く出た。日本語専門家ではない、日本語学習支援者である日本語ボランティアがどこまで日本語学を身につけるべきか、今後検討していく必要があると感じた。

4.2 4回の自主学習会の比較

自主学習会は全部で4回行ったが、前述の通り、それぞれ形式が異なった学習会となった。そこで、改めて、自主学習会に参加した日本語学習支援者6名にいくつかの質問に答えてもらった。その結果、1番良かった学習会は第3回自主学習会、2番目は第4回自主学習会という結果になった。

表3 1番良かった学習会

第1回自主学習会	0人(0%)
第2回自主学習会	1人(16.7%)
第3回自主学習会	3人(50%)
第4回自主学習会	2人(33.3%)

表4 2番目に良かった学習会

第1回自主学習会	0人(0%)
第2回自主学習会	2人(33.3%)
第3回自主学習会	1人(16.7%)
第4回自主学習会	3人(50%)

それぞれ理由として、発言機会の多さが挙げられている。3回目と4回目で差が出たのは、3回目の理由で、少人数で意見を言いやすく考えをまとめやすかった、というものがあることから、4回目の全員で取り組んだ会よりも、3回目のグループワークで取り組んだ会の方が個々の発言回数が多かったからだと言える。1回目は模擬授業だったため、発言機会が少なかったこと、全体での学習会だったため意見しにくかったことが、評価されなかった理由である。ただ、内容自体は良かったので、見学者がゼロになるよう、グループごとに模擬授業をした方がより効果的だったと考えられる。2回目も同様に発言機会が3回目4回目と比べると少なかった。受け身で学ぶよりも積極的に自主的に学ぶ体制を整える必要があった。

4.3 日本語学習支援者の変化

この自主学習会を始めてから、日本語学習支援者が活動時間外も日本語について勉強したり、授業準備に取り組んだりしている姿がよく見受けられるようになった。また、新たなイベントを企画したり、新たにレッスンの担当を5人のボランティアが申し出てくれたりした。この質問にはどう答えたらいいのかと、筆者に聞きにくる日本語学習支援者は、自主学習会を始める前と比較すると、体感ではあるが、約3倍に増加したように感じた。また、4.2の質問からも日本語学習支援者が変化したと言える。

設問10 自主学習会のあと、ご自身の教え方、授業準備などに変化はありましたか？ あれば、教えてください。

J：自分自身がもっと日本語という言語がどういうものを勉強しなくてはいけないと思いました。

K：（日本語学の教材で学ぶと）著者によって説明の仕方が色々なので、自分が納得し、使いやすい表現を探すようになりました。

L：助詞の使い方等、改めて意識した。

日本語学習支援者同士という、一見、別々に活動しがちな人たちが一緒に学ぶことによって、影響を受け、より学ぼうとする姿勢が窺えることから、積極的に活動に参加するという目的を達成できたと言える。また、自己学習会後も学び続ける様子から、継続していくことは自己成長していくことによって可能にできると言える。自己成長の機会はボランティア活動を継続するモチベーションを保つものとなった。

5. 終わりに

本稿では、地域日本語教育に携わる日本語ボランティアの数を確保する方法を見出すことを目的としてきた。日本語ボランティアの協働学習の筆者の実践をもとに分析した結果、日本語ボランティアが求めている学習支援者同士で意見を出し合い、学び合い、成長していくことを満たすことができると分かった。また、感想やアンケートより、今後の活動の継続も見込まれる。つまり、日本語学習支援者同士の協働学習は、ボランティア不足を解消する方法の一つであると主張する。しかしながら、それで本当に継続し続けていけるかどうかは、今後のB地域日本語教室を観察し続ける必要がある。また、日本語学習支援者が協働学習をする中で、どこまでの知識を身につけるかの線引きが曖昧であるという課題も残った。日本語教育推進法の制定により、今後、さらに拡大していく地域日本語教育の現場に、ひとりでも多くの日本語学習支援者である日本語ボランティアが活動に参加し、学び、継続していくために日本語学習支援者同士での協働学習が活用されるよう、学習者のニーズとも照らし合わせながら、より良い方法を模索していく。

参考文献

- 新崎国広（2005）『ボランティアのすすめ——基礎から実践まで』岡本栄一監修・守本友美・河内昌彦・立石宏昭編，ミネルヴァ書房
- 池田幸也（2006）『現代ボランティア論』久美
- 川田麻記（2019）「日本語教育人材の養成におけるサービslラーニングの実践——地域日本語教

- 室での活動を通して——」『サービスマーケティングの実践と研究』1, 42-65
- 興梠寛 (2003)『希望への力——地球市民社会の「ボランティア学」』光生館
- 小島佳子 (2014)「日本語母語話者が地域日本語教室に参加する意義——日本語ボランティアの活動の参加継続につながる動機付け」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』3, 101-110
- 高橋志野 (2017)「日本語ボランティア活動が継続できるシニア社会人男性は、なぜ「一方的に話す」ことをやめられたのか」『日本語教育方法研究会誌』24, 56-57
- 俵山雄司・渡部真由美・田中真寿美 (2017)「地域日本語教育における日本語ボランティアの養成・研修講座の内容の変遷——文化庁事業の平成 20 年度と平成 25 年度の取り組みを比較して——」『日本語・日本文化論集』24, 45-59
- 文化庁, “日本語教育に関する法律について”, 文化庁, 令和元年 6 月 28 日 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/index.html (参照 2020-10-18)
- 法務省, “令和元年末現在における在留外国人数について”, 法務省, 令和 2 年 3 月 27 日 http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00003.html (参照 2020-10-16)
- 山辺真理子 (2011)「「居場所」としての日本語教室——日本語ボランティア養成講座の考え方と実践——」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』13, 66-73

決定詞の違いによる名詞句の適格性について

福嶋 剛司

要 旨

本論文の主な目的は以下の2つである。まず、名詞句における基本的な構造と、名詞句における決定詞の違いが適格性に影響することを議論する。名詞句がDPなのかNPなのかということは特にAbney (1987) が名詞句に対しDP仮説を提案して以降、名詞句の構造が活発に議論されてきた。このことに対し本稿では、名詞句の範疇に定／不定の区別がどのように適格性に影響するのかを、名詞句内の束縛・抜き出しといった現象を基に分類を行う。また、現在の生成文法における極小主義プログラム (Chomsky 1995 *et seq.*) において重要な仮説の1つとなったフェイズ (phase) を概観し、Chomsky (2019) の仮説を元に、フェイズ主要部が拡張した形の可能性を考察する。それにより英語の名詞句における定／不定の差がD主要部を分離拡張した2種類に対応すると主張する。さらに名詞句が不定の際に、「名詞句 of 名詞句 前置詞句」のように2つ重なって生じた場合には前置詞句の外置が不可能になる現象を、この仮説から正しく導くことができることを議論する。

1. はじめに

名詞句内の冠詞の有無に言語間での差があることは日英語を比較するだけでも自明であるが、決定詞の種類の違いにおいても適格性に差が生じることが知られている。まず、目的語の名詞句に不定冠詞を使用した (1a) の場合、照応形 *himself* は適格であるが、代名詞 *him* では不適格になる。それに対し (1b) と (1c) を比較するとわかるように、*Mary's* のように属格名詞句が決定詞として名詞句内に生じると照応形は共起できない。

- (1) a. John_i saw a picture of himself_i/*him_i (Büring 2005: 50)
 b. John loves pictures of himself.
 c. *John loves Mary's pictures of himself. (Carnie 2013: 487)

また、名詞句は (2a, c) のように主語位置にある名詞句から前置詞句を外置させることが可能であるが、その際にも (2b, d) のように名詞句に定冠詞や属格名詞句など、定性があるものが生起している場合、不適格になるといった違いがある。

- (2) a. A book was published about linguistics.
 b. *The book was published about linguistics. (Guéron 1980: 665)

- c. Some/ Many/ More/ Several/ Three books were sold on linguistic theory.
- d. *All (the) / Most/ Both/ John's books were sold on linguistic theory.

(Safir 1982: 279)

しかし、不定冠詞の名詞句内であれば常に前置詞句の抜き出しが可能という訳ではなく、名詞句が2つ重なる場合には不定の名詞句であったとしても抜き出しが不可能になることが知られている。

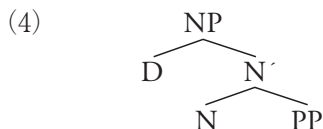
- (3) a. [A review t_i] came out yesterday [of a new book about French cooking]_i
- b. *[A review of a new book t_i] came out yesterday [about French cooking]_i

(Selkirk 1977: 294 一部改変)

本稿では、以上のように英語において定／不定の差によって生じる名詞句内要素の束縛関係・抜き出しに関する適格性の差、また名詞句が重なることによって外置の適格性に差が生じるといった現象をChomsky (2019) のフェイズ主要部の分離仮説を元に議論する。2節では、名詞句というものがどのように分析されてきたのか先行研究を概観し、名詞句の構造がNPではなくDPであることを考察する。3節では、本稿で採用するフェイズ理論がどのようなものであるのかについて議論し、4節では、3節の理論を踏まえ、名詞句はChomsky (2019) が提案する仮説と平行関係を持つ構造を成していると提案する。そして、この仮説が名詞句内要素の束縛関係・抜き出しに関する適格性の差を捉えていることを論じる。5節は結語である。

2. 先行研究

生成文法研究において名詞句は従来X-bar理論内において概略以下のようにNP指定部の位置を占めるものとして分析されており、決定詞は主要部としてX-bar構造を成さないとされてきた。



名詞を主要部とし、冠詞などの決定詞がそれに付随している形というのは、直感的には一見正しいと感じられる。しかし、この分析方法ではNP指定部にJohn'sのような属格名詞句やhisのような属格代名詞が同じように併合されることになる。その結果、こ

の分析方法では、(5a)のように属格を示す「's」の前に名詞句二つが等位接続したときや、片方の代名詞が属格になっていない(5b)の場合、属格名詞句と属格代名詞が混在して等位接続した(5c)の場合で、それぞれ文法性に差が生じることを説明できない。

- (5) a. Jack ('s) and Jill's house
 b. *we and their house (cf. our and their house)
 c. ?*my and Jack's house (Bernstein & Tortora 2005: 1229–1230)

他にも(4)の構造で問題となったのがN'削除(N'-deletion)と呼ばれる現象である。これは、例えば(6)のように言語において音韻上の削除が適用されるのは、最大投射に限ったものであると観察されてきた。

- (6) VP Ellipsis
 a. Mary talked to Bill and Tom did, too.
 b. *I don't know if Leslie has ever studied karate, and I don't know if Gwendolyn has *ever* __, either.¹⁾
 c. I don't know if Leslie has ever studied karate, and I don't know if Gwendolyn *ever* has __, either. (Sag 1978: 148)

(6a)では、VP全体が削除されているため適格であると判断されている。それに対し(6b)では、VP全体は削除されていない。その証拠に、(6c)の場合は、VP全体が削除できているため適格である。以上のようなことを加味し、次のような一般化が成されている。

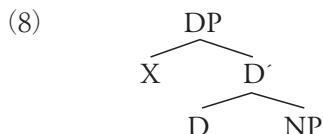
- (7) Ellipsis condition
 Only maximal projections can undergo ellipsis. (Radford 2009: 64)

この条件が正しいとすると、N'削除では指定部を残した中間投射が削除されており、(7)の条件に違反し、また名詞句以外の範疇とは違う削除規則となり理論的統一性に欠け問題となっていた。

この問題に対し、Abney(1987)は、決定詞がNPを補部とするDP仮説を提唱し、次の構造で分析を行った。

1) Jackendoff(1972)の主張するように *completely* のような副詞はVP内に生じる必要のある動詞句内副詞だとすると、次の例が非文法的であることは、VPが削除されたにも関わらずVP内に存在するはずの副詞が生起しているためだと考えられる。このことから(6b)の場合も副詞はVP内に生起していると本稿では考えることとする。

(i) *Annie has partially finished the book, and Judy has *completely* __. (Sag 1978: 149)



この仮説により、属格を表す「's」は、統語上独立した形態素としてD主要部の位置を占めることが可能になったため、先の(6)で挙げたような属格名詞句の等位接続などが上手く捉えられるようになったのである。

またAbney (1987) は決定詞が(9)のように単独で、主語や目的語の位置に現れることが可能であるのは、NP全体が省略されているためだと説明している²⁾。

- (9) a. [_{DP} that [_{NP} e]] was a nice idea
 b. I would like [_{DP} some [_{NP} e]]
 c. John thought about [_{DP} those [_{NP} e]] (Abney 1987: 74一部改変)

この説明はPostal (1966) やRadford (2016) も同様の仮説で、代名詞をD主要部として分析・議論しており次の証拠を挙げている。

- (10) a. did you see us *guys*
 b. he did not insult you *Communists*
 c. you *troops* will embark but the other troops will remain.
 (Postal 1966 cited in Kayne et al. 2014: 19)

この例では、代名詞はD主要部であり、その補部にあるNP部分には具体的な内容を示す名詞要素を表すことが可能であると説明しており、先のAbneyの例とも一致している。

以上のことから、決定詞のみの場合や代名詞の後ろに名詞がある場合は実際には次の(11a, b)のような構造になっていると考えられ、名詞句の構造はDP分析の方がNP分析より正しいと考えられる。



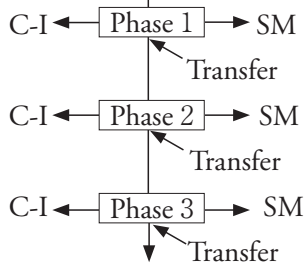
2) 当然ながら次の(ii)のように定冠詞のみで統語構造上に生じた場合、不適格になる。ただし、依然として(9)のように決定詞によっては単独で生起可能なものが存在することも事実であり、本質的に何が、これらの適格性に差を及ぼしているのか解明する必要がある。しかし、この問題は本稿での議論の範囲を超えるため論じない。

(ii) *_{[DP} The _{[NP} e]] was wrong

3. フェイズ理論

極小主義プログラムにおいて仮定されているフェイズ理論は概略以下の通りである。Chomsky (2004; 2007; 2008) は、言語構造の構築において併合が反復適用された統語構築物 (Syntactic Object: SO) が (12) のようにフェイズと呼ばれる統語上の段階ごとに転送 (Transfer) されることで最終的に表現が形成されるとしている。また SO は転送時、意味解釈を担う C-I インターフェイスと音声解釈を担う SM インターフェイスそれぞれに情報が送られると主張している。

(12) Phase-by-Phase Derivation



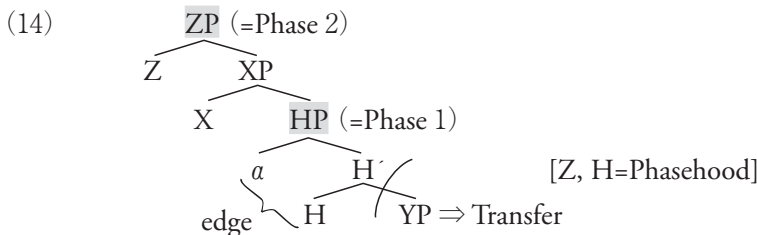
(Totsuka 2015: 4)

そしてこのフェイズは、(13) にあるように統語上でフェイズ主要部 (Phasehood) の投射が2つ完成した段階で、1つ目のフェイズ主要部の補部がインターフェイスに転送され、以降この領域へのアクセスを不可能にする (Chomsky 2001: 13-14)。

(13) Phase Impenetrability Condition (PIC)

The domain of H is not accessible to operations at ZP; only H and its edge are accessible to such operations. (Chomsky 2001: 14)

この定義を樹形図で示すと以下の通りである。(14) にあるように、フェイズが2つ生じた段階 ZP において1つ目のフェイズ主要部 H の補部 YP が転送されることになる (フェイズが形成された箇所を網掛けで示す)。



このフェイズの概念自体は、以下の厳密循環の条件を満たすために設計されている。

(15) Strict Cycle Condition

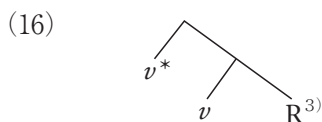
No rule can apply to a domain dominated by a cyclic node A in such a way as to affect solely a proper subdomain of A dominated by a node B which is also a cyclic node
(Chomsky 1973: 243)

つまり一度、より大きく包括的な循環へ移った後では、規則をより早い段階の循環に戻って適用することは不可となるのである。

当時この条件の循環節点はどの範疇であるのかということが大きな問題であったが、フェイズにおいては、命題が完成する単位という基準からフェイズ主要部の範疇をCと v^* であるとする(Chomsky 2000: 107)。さらにChomsky (2004; 2005; 2008)はDもフェイズ主要部であると議論しており、本稿ではこの提案を基にDをフェイズ主要部とし議論する。

4. 分析

ここまでの議論でわかるように、決定詞の違いは名詞句に適用される統語操作の適格性に大きく影響する。この事実を捉えるために、本稿ではChomsky (2019)がフェイズ主要部である v^* を(16)のように v と分離させた仮定がD主要部にも存在すると主張する。



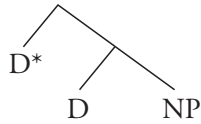
この v^* は従来の他動詞と自動詞・受動態との区別を示すものではなく、二重目的語構文などの三項動詞を用いる際に表れる範疇である。そのためここでは v^*/v はそれぞれフェイズ主要部であると考ええる。

この提案が正しいとするならば同様にフェイズであるCP⁽⁴⁾やDPとの並行関係が崩れ、動詞句のみが(16)のようになる概念的説明が必要となる。この並行関係を保つ必要性も加味し、この提案をD主要部に適用すると(17)のようになる。この仮定をD*P仮説と呼ぶこととする

3) R (root) は根要素などと呼ばれ、 v といった範疇決定子 (categorizer, category marker) によってその範疇を決定される要素のことである。本稿では従来分析で示されてきたVと読み替えても大きな影響はない。

4) 中島 (2016) も Chomsky (2019) の (16) の仮説と非常に近い考えをCPにおいて提案している。

(17) D*P 仮説



この構造は定冠詞・属格名詞句のみに表れ、不定冠詞の場合 D* 主要部はなく D 主要部の投射のみであると考ええる。

この D*P 仮説を採用すると次の (18) の文法適格性における差が説明できるようになる。

(18) a. The rich are becoming even richer.

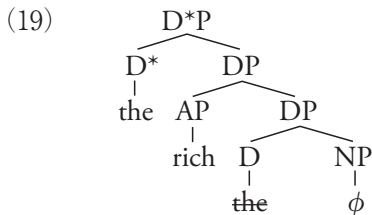
b. *Rich are becoming even richer.

(cf. Rich people are becoming even richer.)

(Longobardi 1994: 632)

この例は NP 部分の *people* が削除されていると考えられる名詞句であるが、(7) で見たように削除が適用される際は最大投射でなければならないことから、形容詞 *rich* は NP に付加することはできない。このことを踏まえると従来の DP 仮説では定冠詞 *the* は D 主要部にあるため説明ができない。

しかし本稿の D*P 仮説を採用すると先の (18a) は以下のような構造になると考えられる。



このように、NP 全体が削除された場合にも形容詞 *rich* は DP 内に付加⁵⁾されているため、(7) の条件に違反することなく削除が適用できる。

ここで、第 1 節で問題にしてきた (1) の束縛関係の適格性の差がどのように分析されるのか見ていく。まず (1a) の文 ((20a) に再掲) は不定冠詞であるため D* がいないと考える。これにより NP は、フェイズが 2 つ完成する *v*P の構造構築まで統語上に残存しているため、主語の *John* は目的語名詞句内の再起代名詞 *himself* と束縛関係が結べる。

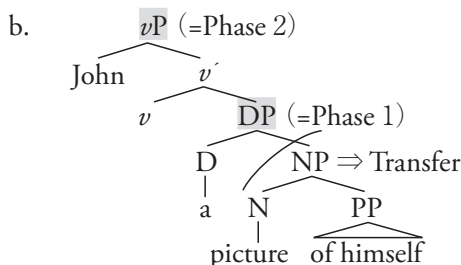
5) 形容詞 (AP) が DP 内に付加しているという仮定は、D* 主要部がない不定冠詞の場合そのままでは問題になるが、DP に対し形容詞が付加する可能性は (i) のように記述属格と呼ばれる属格名詞句が生起する例では存在することから必ずしも否定できないと考えられる。ただし、本稿では紙幅の都合上これ以上論じないこととする。

(iii) a. She lives in this old people's home.

b. I used to love reading those glossy women's magazines

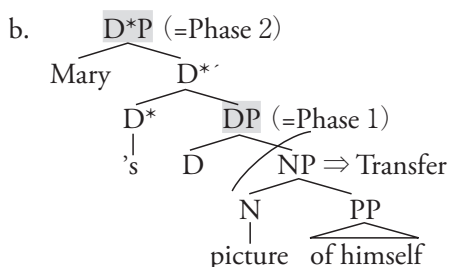
(Alexiadou et al. 2007: 548)

- (20) a. John_i saw a picture of himself_i/*him_i (Büring 2005: 50)



それに対し、不適格である (1c) の文 ((21a) に再掲) は D* 主要部が存在するため名詞句内でフェイズが2つ完成し、NPが転送されてしまうため、再起代名詞 himself は主語 John と束縛関係が結べないことが正しく捉えられる⁶⁾。

- (21) a. *John loves Mary' s pictures of himself. (Carnie 2013: 487)



また (2) の外置についても、定性を持つ場合には (22b) のように、D* 主要部があるためフェイズ主要部が2つになり名詞句の派生段階においてNPが転送されるため、抜き出しが不可能になるという実際の適格判断を正しく捉えられる。

- (22) a. [DP A [NP book [PP t_i]]] was published [PP about linguistics]_i
 b. *[D*P The [DP [NP book [PP t_i]]]] was published [PP about linguistics]_i
 => Transfer

また、不定の名詞句が重なる場合に前置詞句の外置が不可能になる (3b) の例 ((23b) に再掲) は、名詞句の派生にてフェイズ主要部である D が統語構造上に2つ存在するこ

6) 所謂 Picture Noun Phrases (PNPs) と呼ばれる picture of oneself の表現において次のような場合、照応形との束縛関係が成立する。この場合、CP と DP がそれぞれフェイズとなるため非適格になると予測されるため、現段階では本分析はこの例を説明することができない。

(iv) John thinks [CP that [DP pictures of himself] were on sale].

ただし、PNPs はこれ自体が特殊な構文であるとされ特別に議論されており (Kuno 1987; Reinhart and Reuland 1993; Runner et al. 2006)、ここで想定している構造でない可能性も多分にあるため、本稿ではこれ以上論じない。

とになり NP が転送され、PP の外置が不適格になることが説明できる⁷⁾。

- (23) a. [_{DP} A [_{NP} review t_i]] came out yesterday [_{PP} of a new book about French cooking]_i
 b. * [_{DP} A review of [_{DP} a [_{NP} new book t_i]]] came out yesterday [_{PP} about French cooking]_i
 ⇒ Transfer

以上の分析から、1～2節で見てきた定／不定による文法差・名詞句の構造が(17)のD*P仮説により正しく捉えられることを議論した。

5. 結語

以上、名詞句の定／不定の差が当該構造内部にある前置詞句の束縛関係・抜き出しに対し、Chomsky (2019) を元にした D*P 仮説を採用することにより、どのように適格・不適格になるかを議論した。定冠詞・属格名詞句など定性の名詞句における構造は D*P-DP-NP のようになりフェイズ主要部が 2 つあるため、Chomsky (2001) のフェイズ理論に従うと NP が転送されるため NP 内の要素に対し束縛・抜き出しが不可能になることを正しく説明できることを見た。それに対し、不定冠詞が生起した名詞句の構造は DP-NP の構造でありフェイズ主要部が 1 つしかないため NP 内の要素の束縛・抜き出しが可能となることを見た。また名詞句が重なる場合には D* がない場合でもフェイズ主要部が 2 つ存在することになり、下部の名詞句内にある前置詞句の外置が不可能になることを考察した。

参考文献

- Abney, Steven P. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral dissertation, MIT.
- Alexiadou, Artemis, Liliane M. V. Haegeman, and Melita Stavrou. 2007. *Noun phrase in the generative perspective*. Berlin ; New York: Mouton de Gruyter.
- Bernstein, Judy B., and Christina Tortora. 2005. Two types of possessive forms in English. *Lingua*

7) 同様の結果になることが (23b) の例だけでなく wh 移動においても確認されている。この場合も本稿での分析を採用すれば、wh の要素を抜き出す前にフェイズ主要部である D が、統語構造上に 2 つ生じるため NP 以下は転送され移動が不可能になるため、非適格になると説明できる。

(v) a. *Who did you hear [DP stories about [DP a picture of ____]]?

b. *What do you receive [_{DP} requests for [_{DP} articles about ____]]?

(Chomsky 1973: 248 一部改變)

ただし、Chomsky は同様の構造において each other を用いた照応形束縛の場合、適格になると示しており同様の結果を得られない点に関しては、今後解決していく必要がある問題である。

(vi) a. We_i heard [_{DP} stories about [_{DP} a picture of each other_i]]

(Chomsky 1973: 248 一部改變)

115: 1221–1242.

- Büring, Daniel. 2005. *Binding theory*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Carnie, Andrew. 2013. *Syntax: A Generative Introduction*. Third Edition. Hoboken, New Jersey: Wiley-Blackwell.
- Chomsky, Noam. 1973. Conditions on Transformations. In *A festschrift for Morris Halle*, ed. Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky, 232–286. Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam. 1995. Bare Phrase Structure. In *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*, ed. Gert Webelhuth, 385–439. Oxford: Blackwell.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by Phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. Michael Kenstowicz, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2004. Beyond Explanatory Adequacy. In *Structures and Beyond. The cartography of syntactic structures, Volume 3*, ed. Adriana Belletti, 104–131. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam. 2005. Three Factors in Language Design. *Linguistic Inquiry* 36: 1–22.
- Chomsky, Noam. 2007. Approaching UG from Below. In *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1–30. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam. 2008. On Phases. In *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2019. UCLA Lectures. <<https://linguistics.ucla.edu/noam-chomsky/>>.
- Guéron, Jacqueline. 1980. On the Syntax and Semantics of PP Extraposition. *Linguistic Inquiry* 11: 637–678.
- Jackendoff, Ray. 1972. *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kayne, Richard, Thomas Reu, and Raffaella Zanuttini, ed. 2014. *An annotated syntax reader: lasting insights and questions*. Hoboken: John Wiley & Sons.
- Kuno, Susumu. 1987. *Functional syntax: anaphora, discourse, and empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Longobardi, Giuseppe. 1994. Reference and Proper Names: A Theory of N-Movement in Syntax and Logical Form. *Linguistic Inquiry* 25: 609–665.
- Postal, Paul M. 1966. On so-called pronouns in English. *Monograph series on language and linguistics* 19: 177–206.
- Radford, Andrew. 2009. *Analysing English Sentences: A Minimalist Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, Andrew. 2016. *Analysing English Sentences*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reinhart, Tanya, and Eric Reuland. 1993. Reflexivity. *Linguistic Inquiry* 24: 657–720.
- Runner, Jeffrey T., Rachel S. Sussman, and Michael K. Tanenhaus. 2006. Processing Reflexives and Pronouns in Picture Noun Phrase. *Cognitive Science* 30: 193–241.

- Safir, Ken. 1982. Syntactic chains and the definiteness effect. Doctoral dissertation, MIT.
- Sag, Ivan A. 1978. Floated Quantifiers, Adverbs, and Extraction Sites. *Linguistic Inquiry* 9: 146–150.
- Totsuka, Masashi. 2015. On Phasehood of Functional Categories in the Left Periphery. Doctoral dissertation, Tohoku University.
- 中島平三. 2016. 『島の眺望：補文標識選択と島の制約と受動化』. 東京：研究社.

ドイツ語における分離話題化構文の生成について

ハイブリッド分析を中心に

山口 裕太

要 旨

Dieser Artikel kritisiert hauptsächlich Fanselow (1988) und Ott (2011), im Bezug darauf wie beide mit der Hybrid-Analyse „Split-Topikalisierung“ analysiert haben. Sie haben auf das Mis-Match von der Brechung geachtet, das man mit der Bewegung-Analyse oder mit der Kopie- und Tilgung-Analyse als kontinuierlichen Konstituentenansatz (beide Nominalphrasen, d.h. TOP und REM sind kontinuierlich) nicht erklären konnte, deshalb haben sie versucht, mit der Hybrid-Analyse (beide Nominalphrase sind unabhängige Elemente) das Problem zu analysieren. Ich weise jedoch in diesem Artikel darauf hin, dass ihre Theorie einige Nachteile hat.

1. はじめに

個別言語 (individual language) には、(1) に示す英語や中国語のように名詞句が位置する場所により文中での役割が決定される言語と、(2) に示すドイツ語や日本語のように名詞句に付随している要素 (ドイツ語の場合は冠詞 (article)、日本語の場合は格助詞 (case particle)) により、文中のどの位置に置かれても文中での役割は変わらない言語の2種類がある。

- | | | |
|-----|---|------|
| (1) | a. He ate an apple yesterday. | 英語 |
| | b. An apple ate him yesterday. | |
| | c. Ta zuotian chile yige pingguo. | 中国語 |
| | ‘he yesterday ate a apple.’ | |
| | d. Yige pingguo zuotian chile ta. | |
| (2) | a. Der Mann hat gestern einen Apfel gegessen. | ドイツ語 |
| | the man have yesterday a apple eaten | |
| | b. Einen Apfel hat der Mann gestern gegessen. | |
| | c. 昨日、その男性がリンゴを食べた。 | 日本語 |
| | d. 昨日、リンゴをその男性が食べた。 | |

前者は語順が変わることで、名詞句の役割が変化し、命題 (proposition) も変化するが、後者は語順が変化しても名詞句の文中での役割は変化しないため命題も変化することはない。ゆえに、(1) の英語と中国語の例では、語順が文中の名詞句の役割を決定しているため、「リンゴが彼を食べた。」という意味になる。そのため、(1c) と同じ命題にはならないため、ta (he) と yige pingguo (an apple) の語順を入れ変えることは許されない¹⁾。一方、(2a, b) に示すドイツ語と日本語では、文の構成する 2 番目の位置に定動詞 (infinitive verb) を配置すれば、それ以外の要素の語順は比較的自由である。また、(2c, d) に示す日本語も同様に、定動詞を語末に配置すれば、それ以外の語順は自由である。このように語順を入れ替えても命題が変化しない統語操作をスクランブリング (scrambling) という。

また、スクランブリングに似た語順変動の操作に話題化 (topicalization) がある。これは、Ross (1986) によって提案された用語²⁾であり、ある要素をトピック (topic) として明示する統語操作である。また、各個別言語により何が話題要素であるかは変化する。例えば、英語の場合、(3a) に示すように主語よりも前の位置がトピックであり、(3b) に示すドイツ語の場合、定動詞の前の位置、つまり文頭にある要素がトピックを表す。

- (3) a. Beans, I don't like.
 b. VW hat sich der Lehrer gekauft.
 VW have himself the teacher bought.
 'VW, the teacher bought for himself.'

(3a) に示す英語の話題化構文では、主語より前の位置に動詞の目的語である beans が前置されている。そのため、beans がトピックであるとわかる。一方、(3b) に示すドイツ語の話題化構文では、文頭の要素がトピックであるため、動詞の目的語である VW が前置され、トピックを表す。

本稿では、第 2 節でドイツ語の話題化構文は、分離名詞句話題化 (split-NP-topicalization)、分離動詞句話題化 (split-VP-topicalization)、混合分離話題化 (mixed-split topicalization) のような複数の下位分類があることを示す。さらに、話題化構文と分離話題化構文の違いを議論し、分離話題化構文が持ついくつかの興味深い問題点を挙げる。第 3 節では、1 つの構成素を成していたものが一部トピック位置に移動し、残りは動詞の目的語位置に残る移動分析 (movement analysis) とコピー削除分析 (copy and deletion analysis) による分離話題化構文の分析を概観する (本稿では、それら 2 つの分析を連続的構成素分析

1) この際 Ta は he と訳しているが、it の意味もある。その場合、中国語話者間で興味深い違いが生まれる。筆者の依頼したインフォーマント調査では、依頼した 15 人中 11 人が、it の意味で解釈した際、「(食べることができる生物 (人・動物) が) 1 つのリンゴを昨日食べた。」という意味で文法的であると答える。つまり、主語が省略されたと考える。それに対し、残り 4 人のインフォーマントは、主語がないため非文法的であると判断する結果が得られている。このインフォーマント調査に協力していただいた王楽氏に、感謝申し上げる。

2) 原文は Ross (1967) の博士論文 (Ross, John Robert. 1967. Constraints on Variables in Syntax. Dissertation. MIT: Cambridge)

と呼ぶ)。そして、第4節では、Fanselow (1988) や Ott (2011) などによる分析、ハイブリッド分析を考察し、彼らの理論の問題点を指摘する。第5節は結論である。

2. 話題化構文

2.1 話題化構文の特徴

本節では、(3a) のような一般的な話題化構文がどのような構文であるのかを観察する。話題化とは、WH語ではない構成素が主語の前、つまり左辺周辺部 (left periphery) に前置される構文である (Van Hoof 2017: 2)。また、(4) に示すように、前置されたトピック要素は時制句 TP (tense phrase) 内の空範疇 (empty category: *e*) と同一指示 (coindexed) を結ばなければならない (筆者が一部修正)。

- (4) a. $[[_{NP} \text{Beans}]_i \text{ } [_{TP} \text{I don't like } [e]_i]]$. (Van Hoof 2017: 2)
 b. $[[_{AP} \text{Proud of him}]_i \text{ } [_{TP} \text{I've never been } [e]_i]]$ (ibid)
 (5) * $[[_{NP} \text{Beans}] \text{ } [_{TP} \text{I don't like } [\text{tomato}]]]$

(4a) では、動詞 like の補部が空範疇 *e* となっており、文頭のトピック要素 beans と同一指示を結んでいる。(4b) でも同様に、動詞 been の補部は空範疇 *e* となっており、文頭のトピック要素 proud of him と同一指示を結んでいる。しかし、(5) のように空範疇 *e* ではなく他の構成素が配置されてしまうとその文は認可されなくなる。これは、 θ 基準 (θ -criterion) に違反するためである。(4a) の場合、beans は空範疇 *e* の位置で θ 役割が付与されたあと、文頭に移動する。そのため、 θ 基準に違反しない。一方、(5) の場合、tomato は θ 役割が付与されるが、beans はそれが付与されなくなってしまう。そのため、 θ 基準に違反することになり、この文は非文法的となる。これらのことから話題化構文は (6) のように定式化することができる。

- (6) $[[[_X \dots X^0 \dots]]_i \dots [_{XP} \text{YP } [e]_i \text{ (ZP)}]]$ (Van Hoof 2017: 3)

2.2 話題化構文の下位分類

分離話題化構文とは、(7a) のように文頭にある XP の主要部 (head) X ((7a) の場合、NP の主要部 N) のみが左辺周辺部に前置されることである。ドイツ語で最も多く見られる分離話題化構文は (7a) に示すような分離名詞句話題化である。(7b) は (7a) の構造をブラケットで記したものである。

(7) 分離名詞句話題化 (Split-NP topicalization)

a. Bohnen mag er nur grüne.

beans like he only green

‘As for beans, he likes only green ones.’

b. [_{CP} [_{TOP} Bohnen] [_C mag er nur [_{REM} grüne]]] (Van Hoof 2017: 3)

(7b) の構造において、動詞 *mag* の目的語全体が左辺周辺部に前置されてはならず、NP の主要部である *Bohnen* のみが左辺周辺部に配置されている。そして、付加詞 (adjunct) である *grüne* は目的語位置にとどまっているように見える。このことから、この先の議論では、Ott (2011) や Van Hoof (2017) に従い、前置された要素を TOP (topic)、目的語位置に残っている要素を REM (remnant) と呼ぶ³⁾。これらの用語を使用すると、分離話題化構文の特徴として、TOP は REM の空所 (gap) と同一指示を結ぶ (Van Hoof 2017: 3)、と言える。また、分離話題化構文の解釈は、一般的に英語の *as for* 構文の解釈 (*As for beans, ... green ...*) と一致する。

分離話題化構文は、分離名詞句話題化以外にも、以下に示すような分離動詞句話題化、分離形容詞句話題化、混合分離話題化、分離前置詞句話題化、空所のない分離話題化が存在する。

まず分離動詞句話題化は次のようなものである。

(8) 分離動詞句話題化 (Split-VP topicalization)

a. Gegessen hat er nur grüne Bohnen.

eaten has he only green beans

‘He has eaten only green beans’

b. [_{CP} [Gegessen] [_C hat [_{TP} er nur grüne Bohnen ____]]] (Van Hoof 2017: 4)

VP 主要部 *gegessen* のみが TOP に前置されているが、補部である *nur grüne Bohnen* は REM にとどまっているように見える。

次の例は、分離形容詞句話題化である。

(9) 分離形容詞句話題化 (Split-AP topicalization)

a. Stolz ist er vor allem auf seine Kinder.

proud is he especially up his children

‘He is especially proud of his children.’

b. [_{CP} [Stolz] [_C ist er vor allem [_{AP} ____ auf seine Kinder]]] (Van Hoof 2017: 4)

3) 田中 (2016) や Tanaka (2014) では、前者を左セグメント、後者を右セグメントと呼んでいる。また、Rohers (2007) では、前者をスプリットオフ (split-off)、後者をソース (source) と呼んでいる。

AP 主要部 *stolz* のみが TOP に前置されているが、補部である *auf seine Kinder* は REM にとどまっているように見える。

次の例は、混合分離話題化である。

(10) 混合分離話題化 (mixed-split topicalization)

- a. Mädchen verführt hat er schon viele.
girls seduced has he already many
'He has already seduced many girls'

b. [_{CP} [Mädchen verführt] [_C hat er schon [viele ____]]] (Fanselow 1987: 102)

TOP に NP 主要部のみが前置される分離名詞句話題化と TOP に VP 主要部のみが前置される分離動詞句話題化が混合しているように見える。

次の例は分離前置詞句話題化である。

(11) 分離前置詞句話題化 (Split-PP topicalization)

- a. In Schlössern habe ich noch in keinen gewohnt.
in castles have I so far in no lived
'As for castles, I haven't lived in any so far'

b. [_{CP} [In Schlössern] habe ich noch [in keinen ____] gewohnt]

(Fanselow and Ćavar 2002: 69)

c. Ich habe noch in keinen Schlössern gewohnt.

(11) に示す分離前置詞句話題化は、他の分離話題化とは違った振る舞いを見せる。前述した通り分離話題化とは、ある XP の主要部 X のみが前置される現象である。しかし、(11) の分離前置詞句話題化では、PP 主要部 *in* のみが TOP に前置されるのではなく、補部 *Schlössern* も TOP に前置されている。さらに、前置された *in* は REM にも存在しているため重複しているように見える。((11c) は *ich* が話題になった場合の構造であるが、この場合はもちろん *in* は重複しない。) この現象については、次の 2.3 節、第 3 章で詳細に観察する。

また、(12) に示すように REM にある XP 主要部が存在していて、空範疇 *e* がいないように見える空所なし分離話題化 (gapless topicalization) も存在する。

(12) 空所なし分離話題化 (gapless topicalization)

- a. Japanische Autos hat Volker bisher meistens Toyotas gekauft.
 Japanese cars has volker so far mostly Toyotas bought
 ‘As for Japanese cars, Volker bought mostly Toyotas so far.’ (Ott 2011: 4)
- b. [_{CP} [_{TOP} Japanische Autos] hat Volker bisher meistens [_{REM} Toyotas] gekauft.]
- c. Französische Bücher habe ich noch nie welche gelesen.
 French books have I so far never any read.
 ‘As for French books, I haven’t read any so far.’
- d. [_{CP} [_{TOP} Französische Bücher] habe ich noch nie [_{REM} welche] gelesen.

(12a) に示す分離話題化は、TOPのトピック要素に上位語である Japanische Autos、REMに下位語である Toyotasが配置されている。これはTOPとREM間の上位集合 (superset) と下位集合 (subset) の性質を表しており、TOPに下位語である Toyotas、REMに下位語である japanische Autosが配置されることはない⁴⁾。また、(12c) 示した分離話題化では、TOPにはトピック要素が、REMには不定代名詞 welcheが配置されている。

2.3 話題化構文の問題点

2.3.1 構造保持の仮説

全節では分離話題化構文には複数の下位分類が存在することを観察してきたが、本節ではそれら話題化構文が持ついくつかの問題点について概観する。まず1つ目の問題点として挙げられるのは、移動 (movement) に関する制約である構造保持の仮説 (structure-preserving hypothesis) (Emonds (1970, 1976)、Chomsky (1986)) に違反する点である。構造保持の仮説では、「i. 最大投射 (maximal projection) のみ別の最大投射位置へと移動できる。ii. 主要部のみがX⁰位置へと移動できる。」としている。そのため、分離名詞句話題化、分離動詞句話題化、分離形容詞句話題化では、すべて主要部が左辺周辺部であるCP (complementizer phrase: CP) 指定部 (specifier) に移動しているため構造保持の仮説に違反し、排除されるはずである。

2.3.2 TOPとREM間の不一致

Van Riemsdijk (1989) が提案した移動分析では、i. TOP_i … [_{DP} REM t_i] のようにTOPとREMは連続的構成素 (continuous constituent) を形成するとしていた (Ott 2011: 40)。そのため、移動分析で問題となるのは、先で見た (11) の分離前置詞句話題化の際の前置詞 in の重複や (13) のような冠詞の重複 (determiner overlap) である。

4) 語用論的理由のため (Ott 2011: 4)

- (13) a. Eine Lösung hat er eine bessere als ich.
a solution has he a better than I
‘As for solutions, he has a better one than I have.’
b. [_{CP} [Eine Lösung] hat er [_{NP} eine bessere ____] als ich] (Van Hoof 2017: 5)
c. * [_{NP} eine bessere eine Lösung] (ibid)
d. Eine Katze habe ich hier noch keine schwarze gesehen. (Ott 2011: 32)
a cat has I here so far no black seen
e. [[_{CP} Eine Katze] habe ich hier noch [_{NP} keine schwarze ____] gesehen]

それゆえ、(13a)に示すTOPの不定冠詞eine、(13d)に示す否定不定冠詞keineは余分な(extra)要素であり(Ott 2011: 32)、認可されない。

また、前置詞・冠詞の重複だけではなく(14)や(15)に示す屈折の不一致も問題となる。

- (14) a. Geld hat er keines.
Money has he none
‘As for money, he has none.’
b. [Geld] hat er [_{NP} keines ____]. (Van Hoof 2017: 9)
c. [_{NP} kein (*-es) Geld] (ibid)
(15) a. Polnische Gänse hat sie keine gekauft.
polish geese have she none bought
‘As for polish goose, she has bought none.’
b. [Polnische Gänse] hat sie [keine ____] gekauft. (Van Hoof 2017: 9)
c. *[keine polnische Gänse]
d. *[Polnischen Gänse] hat sie [keine ____] gekauft. (ibid)
e. [keine polnischen Gänse]

(14)の不定冠詞の屈折の不一致では、TOPにトピック要素Geldが前置され、REMに否定不定冠詞keinesが残置しているように見える。そのため、TOPをREMの隣に戻しても文法的な文を予測する。しかし、(14c)に示すようにTOPとREMの連続的構成素*keines Geldは屈折変化に誤りがあるため認可されない(kein Geldなら文法的である)。また、(15)の形容詞の屈折の不一致でも同様のことが言える。TOPにトピック要素Polnische Gänseが前置され、REMに否定不定冠詞keineが残置しているように見えるため、TOPをREMの隣接する元位置に戻しても文法的な文を予測する。しかし、これは(15b)に示すように連続的構成素*keine polnische Gänseとなるため誤りである。一方、

(15d) に示すようにTOPにトピック要素Polnischen Gänseが前置され、REMに否定不定冠詞keineが残置するのは非文である。そのため、TOPをREMに戻しても非文を予測するが、連続的構成素keine polnischen Gänseは文法的である。この事実から、TOPとREMはそれぞれ依存しあわない形で単一の名詞句として機能する(田中 2016)といえる。

(14) と (15) に示した不一致に関する問題は、TOPをREMの隣接する元位置に戻したときに文法的となる場合とならない場合がある。TOPとREMの格の一致は義務的である(Ott 2011: 36)。つまり、(16) に示すように格の不一致は認可されない。

- (16) a. *Männern küsst sie nur hübsche.
 men. DAT kisses she only handsome. ACC
 ‘She kisses only handsome men.’ (Ott 2011: 36)
- b. *Kinder hat Timo schon oft welchen geholfen.
 children. ACC/NOM has Timo already often some. DAT helped
 ‘As for children, Timo has already often helped some.’ (ibid)

(16a) の分離名詞句話題化では、TOPのトピック要素Männernは与格(dative)であるが、REMに残置したhübscheは対格でマークされている。そのため、格の不一致で非文になる。また、(16b) の空所のない分離話題化では、TOPのトピック要素Kinderは対格(accusative)または主格(nominative)であるが、REMのwelchenは与格でマークされている。そのため、(16b) 同様に非文となる。

以上、本節では、本稿の議論の中心となる分離話題化がいくつかの種類に下位分類されることを観察し、またそれらが持ついくつかの問題点について指摘した。

3. 連続的構成素分析

3.1 移動分析

まず2.3.2節で少し触れたVan Riemsdijk (1989) が提案した移動分析をもう一度議論する。分離話題化構文は、移動によりその非連続性が形成される(田中 2016: 390)とするのが基本的である。それは(17) に示す再構築(reconstruction)により保証される(筆者が一部修正)。

- (17) a. [Bücher von einander_i]_j sind uns_i [keine e_j] bekannt. (Rohers 2007: 325)
 books by each other are us none known
 ‘As for books of us, we knew none.’

- b. *[Bücher von ihm]_i hat Elsing_i nur [wenige e_j] im schrank. (Ott 2011: 28)
 books by him has Elsing only few on-the shelf
 ‘As for books of him, Elsing has only few on the shelf’

(17a) では、先行詞 *uns* が TOP に配置されている照応形 *einander* を C 統御していないにもかかわらず文法的である。この事実は、トピック要素 *Bücher von einander* が前置される前に、空範疇 *e* の位置で束縛原理 (A) 「照応形は統率範疇内で束縛されていなければならない。」が適用されたことを表す。一方、(17b) では、先行詞 *Elsing* は TOP に配置されている代名詞 *ihm* を C 統御していないにもかかわらず非文である。これは、トピック要素 *Bücher von ihm* が前置する前に、空範疇 *e* の位置で束縛原理 (B) 「代名詞は統率範疇内で自由でなければならない。」が適用されたことを表す。さらにトピック要素が TOP に移動してきたことを表す証拠に格の問題がある。(18) に示す分離名詞句話題化を例に観察する。

- (18) Bohnen mag er nur [grüne *e*]. (=7a)
 beans like he only green
 ‘As for beans, he likes only green ones.’

TOP のトピック要素 *Bohnen* は動詞 *mag* の直接目的語として機能することは疑う余地はない (Tanaka 2014: 241)。仮に、V 補部ではなく TOP にトピック要素が基底生成 (base-generated) されるなら、動詞から対格を付与されることがなく格フィルター (case filter) に違反してしまう。そのため、動詞から対格が与えられる位置、つまり V の補部に基底生成されたあと、対格が付与され TOP に移動してきたと考えられる。

再構成と格の問題から、TOP は REM と連続的構成素関係 [_{XP} REM TOP] を結んでいと考えられる。しかし、再構築をした場合適切な連続的構成素にならなければならないが、2.3.2 節で議論したように移動分析では、冠詞の重複や屈折の不一致の問題を解決することができない。そのため、移動分析を用いて分離話題化構文の生成を分析することには多くの問題点があると言える。

3.2 コピー削除分析

移動分析では、(17a, b) や (18) に示したように TOP は REM と連続的構成素関係 [_{XP} REM TOP] を結んでいて、TOP のみが前置され、移動元の位置には空範疇 *e* を残すとしていた。しかし、Chomsky (1993) によって提案された移動のコピー理論 (movement of copy theory) では、移動したと見える要素は元の位置にそれと同じコピーを残すとしている。その後、音声形式部門 (phonetic form) で移動先または移動元でコピーが削除

(deletion) されるとしている。

コピー理論を採用し、分離話題化構文を分析した Fanselow and Ćavar (2002) は、移動はTOPのみではなくDP全体であるとしている (Ott 2011: 45, Rohers 2007: 326)。Fanselow and Ćavar (2002) に従うと、TOPとREMの連続的構成素 [_{XP} REM TOP] 全体がC指定部に前置され、[_{CP} [_{XP} REM TOP]... [_{XP} REM TOP]] を形成すると考えられる。その後、音声形式部門でC指定部にコピーされた要素または元位置のコピーが削除される。これにより (19) に示す冠詞の重複や前置詞の重複が明確に説明できるようになる。

- (19) a. Eine Lösung hat er eine bessere als ich. (=13a)
 a solution has he a better than I
 ‘As for solutions, he has a better one than I have.’
 b. [_{CP} [_{NP} Eine bessere Lösung] hat er [_{NP} eine bessere Lösung] als ich]
 (20) a. In Schlössern habe ich noch in keinen gewohnt. (=11a)
 in castles have I so far in no lived
 ‘As for castles, I haven’t lived in any so far’
 b. [_{CP} [_{PP} In ~~keinen~~ Schlössern] habe ich noch [_{PP} in keinen ~~Schlössern~~] gewohnt]

(19b) では、TOPのみでなく連続的構成素 [_{NP} eine bessere Lösung] 全体がC指定部にコピーされている。そして、音声形式部門において、移動先で**bessere**が、移動元で**Lösung**がそれぞれ削除されている。その結果、(19a) のような文が生成される。他方、(20b) の構造において、連続的構成素 [_{PP} in keinen Schlössern] 全体がC指定部にコピーされる。そして、移動先で**keinen**が、移動元で**Schlössern**が削除されることにより (20a) のような文が成立する。

Ott (2011) は、この分析は等位構造制約 (coordinate structure constraint) に抵触してしまうと述べている。Fanselow and Ćavar (2002) の提案では、トピック要素はDP全体が前置するとしている。しかし、(21a) に示すように等位接続詞 **und** により等位接続されたREM要素はそれぞれ異なった2つの修飾語 (modifier) を含んでいる (Ott 2011: 49)。そのため、どちらかの修飾語と連続的構成素関係を結べば、どちらかの修飾語とは連続的構成素関係が結べない。ゆえに、等位構造制約に違反する。しかし、この問題は (21b) のような構造ならうまく説明ができる。

- (21) a. Bücher habe ich nur interessante russische *e* und langweilige französische *e* gelesen.
 books has I only interesting Russian and boring French read
 ‘As for books, I have read only interesting Russian one and boring French one.’
 (Ott 2011: 49)

- b. [_{CP} [~~interessante russische Bücher und langweilige französische Bücher~~] habe ich
nur [_{CP} [interessante russische Bücher und langweilige französische Bücher] gelesen]

(21a)において、連続的構成素 [_{DP} interessante russische Bücher und langweilige französische Bücher]を形成することで、それ全体がC指定部にコピーされる。その後、音声形式部門において、移動先でinteressante russische Bücher und langweilige französischeがされ、移動元でBücherが削除されると(21a)の構造が生成される。

コピー削除分析は、移動分析で説明することができなかった(19)や(20)に示した重複の問題、さらに(21)に示した等位接続詞が使われた分離話題化も等位構造制約に違反することなく生成可能だと説明ができる。さらには、再構築という下方移動(down-grading)操作で付加的な操作を用いなくてもコピー削除分析を採用することで、上記で見た束縛原理(binding principle)の説明も可能になる。

コピー削除分析でも、TOPとREM間の不一致の問題を解決することはできない。また、Chomsky (2004)によると、削除は構造上最も高いコピーには適用がされず、音声化しなければならないとしている。そのため、コピーの削除の基準は更なる研究が必要である。

4. ハイブリッド分析

4.1 Fanselow (1988) による分析

3章で観察した移動分析やコピー削除分析はどちらの分析も、TOPとREMは連続的構成素[_{XP} REM TOP]であるとしている。しかし、これらの分析はすでに見たように様々な問題点を含んでいる。この事実は、TOPとREMは連続的構成素[REM TOP]ではなく、分かれて基底生成されている(Ott 2011: 50)、つまりそれぞれ独立した名詞句(autonomous noun phrases)であることを示している。本節では、このハイブリッド分析で分離話題化構文を分析したFanselow (1988)とOtt (2011)を観察する。Fanselow (1988)の分析では、(22)の英語の二重目的語構文(double object construction)や(23)のハンガリー語の例を挙げ、NPが動詞に付加されていることを明示した。

(22) [_{VP} [_V [_V gave] [_{NP} her]] [_{NP} the book]] Fanselow (1988)

(23) a. János levelet ír (ibid)

János letter write

‘János writes letter’

b. János moziba ment (ibid)

János theater went

‘János went to theater’

(22) の二重目的語構文では、間接目的語 *her* と直接目的語 *the book* が V に付加されている。他方、ハンガリー語の例では (23a) の場合、動詞 *ir* に直接目的語 *levelet* が付加されており、(23b) の場合、動詞 *ment* に直接目的語 *moziba* が付加されているように見える。ここで重要なのは、V に付加された要素は定冠詞を持たない NP である点である。Fanselow (1988) では、分離話題化構文の分析にもこれが当てはまるとしている。つまり、定冠詞を持たない NP である TOP は V に付加される。このことから、(24a)、(25a) の構造はそれぞれ (24b)、(25b) であると考察している。

- (24) a. Französische Bücher hat Amina schon viele gelesen. (Ott 2011: 50)
 French books have Amina already many read
 ‘As for French books, I have already read a lot of one.’
 b. [_{CP} [_{NP1} französische Bücher]_i hat Amina [_{VP1} [_{NP2} schon viele *pro*]_V _{t_i} [_{V2} gelesen]]]]
- (25) a. Franzaesische Bücher gelesen hat Amina schon viele. (Ott 2011: 50)
 French books read have Amina already many
 ‘As for reading French books, I have already read a lot of one.’
 b. [_{CP} [_V [_{NP1} französische Bücher] [_{V2} gelesen]]_i hat Amina [_{VP1} schon [_{NP2} viele *pro*]_{t_i}]]

(24b) の構造において、REM の *viele pro* は A 位置 (A-position)、つまり V の補部に基底生成され、TOP の *französische Bücher* は V に付加されている (Ott 2011: 50)。また、V の投射を 2 つ作り、それぞれの投射が V 補部の *viele pro* と V 付加部の *französische Bücher* に対格を付与する (Fanselow 1988: 104)。そして、付加された NP (TOP) が移動することにより、*pro* を束縛し (Van Hoof 2017: 18)、同一指示を結ぶことができる。他方、(25b) では、複合動詞 (verbal complex) (V と付加された NP (TOP)) 全体が前置されることにより生成される (Ott 2011: 50)。

このように分析することで、(24) (=13) に示す TOP と REM 間の不一致の問題を解決できるように思える。

- (26) a. Polnische Gänse hat sie keine gekauft. (=13)
 b. [_{CP} [_{NP1} Polnische Gänse]_i] hat sie [_{VP} [_{NP2} keine *pro*] [_V _{t_i} [_V gekauft]]]. (Ott 2011: 50)

しかし、Fanselow (1988) の分析はいくつか問題がある。Fanselow (1988) の主張では、NP1 は基底生成された位置では NP2 の *pro* (音形を持たない代名詞) を束縛していない。

そのため、*pro*を束縛するためにNP1は上昇するとしている。しかし、*pro*を束縛するために移動するというのは、移動の駆動要因 (driving force) とはなりえない。なぜなら、wh移動 (wh-movement) を誘引するQ素性 (Q feature)、かつてのEPP素性 (Extended Projection Principle feature: EPP feature) やWH素性 (wh feature) である末端素性 (edge feature) といった素性が移動の駆動要因となるからである。また、同じ格を持つ2つのNPが表れるのは、*pro*が束縛される場合に制限される (Fanselow 1988: 106) と主張しているが、これは*pro*に依存しているため空所のない話題化を説明することができない。さらに、この理論では、(27a) に見るような複合名詞句制約 (complex NP-constraint) に違反する文が認可されると予測してしまう (Ott 2011: 51)。

- (27) a. *Bücher habe ich [_{NP} eine Geschichte [_{CP} dass Kay schon mehrere geschrieben hat]] gelesen. (Ott 2011: 51)

‘As for books, I heard a story that Kay had already written several ones.’

- b. Bücher_i ...[_{VP} [_{NP}... [_{CP} ...mehrere *pro*_i ...]] [_V t_i gelesen]] (ibid)

(27a) では、NPである *eine Geschichte* に支配されている *dass* 節内の *Bücher* が抜き出されているため非文となる。

4.2 Ott (2011) による分析

Fanselow (1988) は、上で見たようにTOPはVの付加部、REMはV補部に生成されると分析していたが、Ott (2011) は、裸述語構造 (bare predicate structure) {DP, NP} を提案し、TOP (NP) とREM (DP) は順序の指定のない集合を直接併合 (set-Merge) する (Ott 2011: 67) としている。この裸述語構造 {DP, NP} は、どちらも語彙項目 (lexical item) ではないのでラベルが決まることはない。そのため、どちらか一方 (NP) が上昇し、DPラベルが与えられることで、[NP_{[DP DP, <NP>]] という構造が構成される。この分析での重要な点は、Fanselow (1988) とは違い、TOPとREMは生成された段階では対称的であり、これが移動により非対称的になるという点である。つまり、TOPとREMの順序対が明確である対併合 (pair-Merge) では移動が要求されない。}

また、格の問題は複合一致 (multiple Agree) により説明できる。DPとNPは両方、裸述語構造 {DP, NP} としてVの補部に生成される。そのため、探査子 (probe) の *v* は目標 (goal) であるNPとDPと複合一致し、それらに対格が付与される。これらのことから、(28) の分離名詞句話題化は (29) のような派生をすると考えられる (移動した要素は取り消しラインで削除を示す)。

- (28) Gute Zeitungen kennt Fabian nur eine aus Berlin. Ott (2011: 73)
 good newspapers know Fabian only a from Berlin
 ‘As for good newspaper, Fabian knows only one from Berlin.’
- (29) a. [_{VP} {?? [_{DP} eine *e* aus Berlin], [_{NP} gute Zeitungen]} kennt]
 b. [_{VP} [_{NP} gute Zeitungen] [_{VP} Fabian [_{VP} [_{DP} [_{DP} eine *e* aus Berlin], [_{NP} gute
 Zeitungen]] kennt] kennt]
 c. [_{TP} Fabian [_{VP} [_{NP} gute Zeitungen] [_{VP} Fabian [_{VP} [_{DP} [_{DP} eine *e* aus Berlin], [_{NP}
 gute Zeitungen] kennt] kennt]]]
 d. [_{CP} [_{NP} gute Zeitungen] kennt [_{TP} Fabian [_{VP} [_{NP} gute Zeitungen] [_{VP} Fabian [_{VP}
 [_{DP} [_{DP} eine *e* aus Berlin], [_{NP} gute Zeitungen] kennt_v] kennt]]]]]

DPとNPは直接併合し、対称的な裸述語構造{DP, NP}を構成する。しかし、どちらも語彙項目ではないためラベルは決まらない。そして、(29a)において、Vが裸述語構造と併合される。その後、(29b)に示すようにVが_vに主要部移動(head-movement)することで、裸述語構造に対格が付与される。_vPが完成する前段階でNPのgute Zeitungenの移動により、構造が非対称的となる(Ott 2011: 73)。ゆえに、BPSのラベルがDPであると決定される。また、この段階でフェイズ(phase)が完成され_vP補部以下はスペルアウト(spell-out)される。(スペルアウトが適用された箇所は網掛けで示す。)(29c)では、FabianがTの末端素性によりT指定部にA移動し、主格が付与される。その後、(29d)で、VはCに主要部移動し、NPはC指定部に移動する(Cが[+topic]を持つため、C指定部への移動が誘発される)。このようにNPが_vPに付加され、さらにC指定部へと連続的に移動することを連続循環移動という(succesive-cyclic movement)。さらに、(30)に示す混合分離話題化では、(31)の派生をすると考えられる。(TPまでの派生を記述する。)

- (30) Französische Bücher gelesen hat Amina bisher nur drei langweilige.
 French books read have Amina so far only three boring
 ‘As for reading French books, Amina only read three boring ones so far.’
- (31) a. [_{VP} {?? [_{DP} drei langweilige *e*], [_{NP} Französische Bücher]} gelesen]
 b. [_{VP} [_{DP} drei langweilige *e*] [_{VP} Amina [_{VP} [_{NP} [_{DP} drei langweilige *e*], [_{NP}
 Französische Bücher]] gelesen] hat]
 c. [_{TP} Amina [_{VP} [_{DP} drei langweilige *e*] [_{VP} Amina [_{VP} [_{NP} [_{DP} drei langweilige *e*],
 [_{NP} Französische Bücher] gelesen] hat]]]

上で見た分離名詞句話題化の際、対称的である裸述語構造{DP, NP}は、NPが移動することで非対称的になり、そのラベルがDPであると仮定していた。しかし、混合分離話

題化の際は、DPが移動することにより非対称性が生じ、そのラベルはNPであるとしている。そして、VP前置 (VP-preposing) により (30) の構造が生成されると分析している。

Ott (2011) の分析は、*pro* を仮定せずとも分離話題化構文を分析することができるように思える。しかし、裸述語構造 {DP, NP} のどちらかの移動がラベルを決定するためというのは、やはり Fanselow (1988) と同様に移動の駆動要因とはなりえない。Ott (2011) は、次の計算機構 (computation) に情報を与えるために統語対象のラベルが決められなければならない (Ott 2011: 65) と述べている。しかし、派生は破綻 (crash) するが、ラベルが決まらなくても次の計算機構に進むことは可能である。つまり、裸述語構造 {DP, NP} のどちらかの移動は、非文になるのを避けるための処置である。また、分離名詞句話題化の際はNPが移動し、混合分離話題化の際はDPが移動すると主張しているが、それでは理論的統一性に欠けると思われる。以上のことから、Fanselow (1988) で仮定していた *pro* を採用せず、裸述語構造 {DP, NP} を用いることでどのように話題化構文が生成されているかを分析した Ott (2011) の理論も説明力に欠けるため、理論の修正が必要である。

5. 結語

本稿では、ドイツ語の分離話題化構文の生成について、TOPとREMが連続体を成す1つの名詞句であるという連続的構成素アプローチとTOPとREMはそれぞれ独立した名詞句であるというハイブリッド分析の2つの分析方法で議論してきた。連続的構成素アプローチである移動分析やコピー削除分析では屈折の不一致の説明はできない。そのため、主にハイブリッド分析の先行研究として Fanselow (1988) と Ott (2011) での議論を概観した。Fanselow (1988) では、TOPはVに付加され、V補部に項としてREMが基底生成されると主張している。そして、REM内の *pro* を束縛するために、Vに付加されたTOPは上昇すると分析されている。また、Fanselow (1988) の理論を発展させた Ott (2011) では、対照的である裸述語構造 {DP, NP} がV補部に基底生成され、裸述語構造のラベルを決定するためにNP (TOP) またはDP (REM) が移動すると分析している。しかし、どちらの分析でも、移動の駆動要因とはなりえない。そのため、どちらの理論も改善が必要であることを指摘した。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.
 Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
 Chomsky, Noam. 2004. *The Generative Enterprise Revisited: discussion with Riny Huygheghe*, Henk

- van Riemsdijk, Naoki Fukui, and Miboko Zushi*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Emonds, Joseph. 1970. *Root and Structure-Preserving Transformations*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Emonds, Joseph. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Fanselow, Gisbert. 1987. *Konfigurationsalität*. Tübingen: Narr.
- Fanselow, Gisbert. 1988. Aufspaltung von NPn und das problem der freien Wortstellung. In *Linguistische Berichte* 114: 91-113.
- Fanselow, Gisbert, and Damir Ćavar. 2002. Distributed Deletion. In *Theoretical Approaches to Universals*, edited by Artemis Alexiadou, 65-109. Amsterdam: John Benjamins.
- Hoof, Hanneke van. 2017. Split Topicalization. In *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*, Second Edition, edited by Martin Everaet and Henk C. van Riemsdijk, Malden, Mass.: Wiley Blackwell.
- Ott, Denis. 2011. Local Instability: the syntax of split topics. Harvard University, Ph. D. thesis Cambridge, Mass.
- Riemsdijk, Henk C. van. 1989. Movement and Regeneration. In *Dialect Variation and the Theory of Grammar*, edited by Paola Benincà, 105-136. Dordrecht: Foris.
- Rohers, Dorian. 2007. Split-NPs as an instance of sideward movement. In *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 13: 323-336. Penn Graduate Linguistics Society.
- Ross, John Robert. 1986. *Infinite Syntax!* Norwood, Nj: Ablex.
- Tanaka, Masatoshi. 2014. »Ich liebe dich nicht.« Wahrheiten gibt es immer zwei - eine die man sagt und eine die man denkt: Zur Split-Topikalisierung im heutigen Deutsch”. In *TOYOHOGAKU* 58/2: 223-248. Tokyo: Toyo University.
- 田中雅敏. 2016. 「ドイツ語の分離話題化構文の生成」. 『東洋法学』59: 394-374.
- 田中智之. 2013. 『朝倉日英対照言語学シリーズ5統語論』. 東京: 朝倉書店.

中国語の“一个样”の用い方及び その日本語訳の特徴の考察

吉野 孝介

要 旨

本文针对汉语学习者使用“一个样”时出现的误用，使用语料库中的实际使用语料对汉语“一样”和“一个样”的语义、语法特征进行了描述及归纳。将词典中对“一样”用法的七分法修改为八分法，进行了补充。

并以“一样”的语义、语法特征为标准，将“一个样”的用法归结为两类。也进行了详细描述及归纳整理。采用语料库实际语料调查及语言使用意识调查的方法，对比考察了“一样”和“一个样”的区别。

0. はじめに

“他和哥哥长得一个样”における中国語の“一个样”について辞書¹⁾や文法の本では説明がなく、中国人の友達に聞いても、“一样”と同じく「同じである、違いがない」のような説明がほとんどだが、日本人の中国語学習者でも次のような誤用²⁾が見られる。

(Ⅰ)我々二人の意見はまったく異なる。

【誤用例①】我们俩的意见完全一个样。

(Ⅱ)彼ら二人は中国語をしゃべるのが同じようにうまい。

【誤用例②】他们俩的汉语一个样好。

“他和哥哥长得一样”は“他和哥哥长得一个样”とも言える。【誤用例①】の“完全一个样”と【誤用例②】の“一个样好”は、“完全不一样”“一样好”にしないと不自然である。では、“一个样”を使うのはなぜ不自然なのか、“一样”と“一个样”にはいかなる違いがあるのか。辞書と文法の本の説明だけでは“一个样”の用い方の特徴を説明しきれないことがわかった。

本稿は辞書や文法の本などの作例だけではなく、コーパスなどの実例も考察し、中国

1) 『中国語文法用例辞典——「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』(2003、呂叔湘編集、牛島徳次翻訳、菱沼透翻訳)、『中日辞典』(1992、北京對外經濟貿易大學、小学館)、『現代漢語詞典(第7版)』(2016、中国社会科学院語言研究所詞典編集室)、『現代漢語實用標詞類詞典』(2000、李臨定 主编)、『實用現代漢語語法(増訂版)』(2001、劉月華、潘文娛など著)、『漢語量詞大詞典』(2013、劉子平)、『現代中国語辞典』(2001、香坂順一)、『東方中国語辞典』(2004、相原茂、荒川清秀、大川完三郎)などを参照。

2) 誤用例は中国語を三年以上に勉強している日本語母語話者の作文である。

語の“一个样”の用い方の特徴を明らかにすることをめざす。また実例での使用実態調査、学習者と母語話者の使用意識調査によって“一样”と“一个样”の使い分けも考察していきたいと思う。

1. 中国語の“一样”と“一个样”の用い方の特徴

本稿では、中国語の“一样”“一个样”については、『中国語文法用例辞典——「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』（2003）、『中日辞典』（1992）、『東方中国語辞典』（2004）、『現代漢語詞典（第7版）』（2016）などを調査した。その結果は次のようにまとめられる。

【結果①】³⁾「同じだ、違いがない」という意味項目については、各辞書はほぼ同様である。

【結果②】⁴⁾「～に似ている、～のようだ」という意味項目については、内容的には大きな違いは見られないが、『現代漢語詞典（第7版）』（2016）は含まれない。

【結果③】⁵⁾“一个样”については、各辞書は触れていない。

次に、中国語原文⁶⁾における“一样”“一个样”の実例を対象に、その使用実態を調査し、“一样”“一个样”の用い方の特徴を明らかにする。また、“一样”“一个样”に対応する日本語も考察する。調査した結果、“一样”“一个样”の用例数は、下記の通りである。



〔図表 1〕

上記の〔図表 1〕に示したように、“一样”を使う用例は1274例もあり、“一个样”である用例は21例だけである。“一样”は“一个样”の60.67倍となる。

3) 『中国語文法用例辞典——「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』（2003）：同じだ、違いがない（P443）

『中日辞典』（1992）：同じである、違いがない

『東方中国語辞典』（2004）：同じだ、差がない（P1522）

『現代漢語詞典（第7版）』（2016）：同样；没有差别。

4) 『中国語文法用例辞典——「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』（2003）：類似していることを表す。用法は“似的”（～のようだ）に近い。（P443）

『中日辞典』（1992）：～に似ている、～のようだ。

『東方中国語辞典』（2004）：似ている。多く“像／好像……一样”の形で用いる。（P1522）

5) 中国語文法用例辞典——「現代漢語八百詞増訂本」日本語版（2003）、『中日辞典』（1992）、『東方中国語辞典』（2004）、『現代漢語詞典（第7版）』（2016）

6) 『中日対訳コーパス』（第一版）

1.1 中国語の“一样”の用い方及び日本語訳の特徴

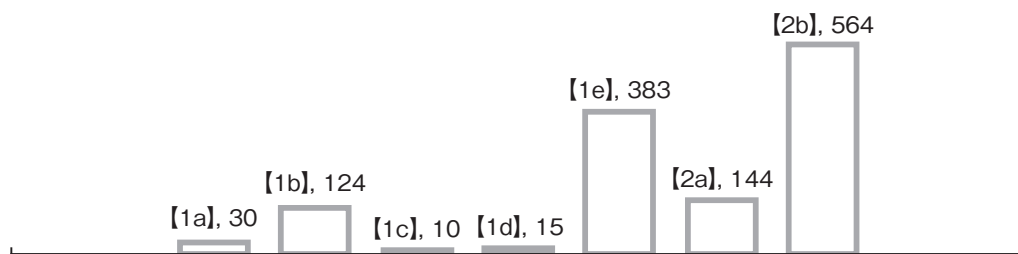
意味項目の「同じだ、違いがない」、「～に似ている、～のようだ」については、『中国語文法用例辞典——「現代漢語八百詞増訂本」日本語版』（2003）はさらに下記のように下位分類をした。

【図表 2】

①「同じだ、違いがない」	【1a】“一样+的+名”
	【1b】述語となる
	【1c】“一样+形”
	【1d】“一样[+可以]+動”
	【1e】“跟/和/同…一样”
②「～に似ている、～のようだ」	【2a】“名+一样+的+名” ある事物を用いて、他の事物のたとえとする。
	【2b】～と同じように、～と同じようにみなす

次に、中国語原文における“一样”（合計1274例）を考察対象⁷⁾に、“一样”の用い方を検証し、また各用い方に当たる“一样”に対応する日本語訳も考察したいと思う。

調査した結果、各用い方に当たる用例数は、下記の通りである。



【図表 3】

1.1.1 【1a】に当たる“一样”

辞書では、【1a】の例として“两个村子一样的地，一样的条件，为什么产量差别这么大”（2つの村は同じ耕地、同じ条件で、どうして生産量の差がこんなに大きいのか）と挙げられている。今回の調査では、“一样的地，一样的条件”のような“一样+的+名”の【1a】に当たる用例が30例あり、全体の2.4%を占めている。次の例1と例2がそれぞれである。

例1 这里是丰富多彩，五颜六色的，你把眼光落在哪儿，都找不到形状相同、色调一样的地方。（変化と色彩に富み、どこにも目をやっても地形や彩りが同じ所は見当らない）。

7) 「中日対訳コーパス」(第一版)における中国語原文の実例である。

例2 第一代新豆子都放置在老黄酱上，于是乎迅速地发酵和腐烂，都变成了一样的味道，一样的稀泥稀糊状的物质，干了以后便变成一层痂皮。（新しい豆はたえず古い味噌の上に置かれるが故に速やかに醗酵し腐蝕して、同じ味、同じドロドロした物体になり、乾燥するとカラカラになる。）

上記の“一样的地方”“一样的味道”“一样的稀泥稀糊状的物质”は【1a】に当たる用例であり、“一样+的+名”が“找”“变”の目的語になる。いずれもの日本語訳は「同じ」となる。

【1a】の例は「同じ」の訳以外、下記の三つの例のように日本語訳することも可能である。

例3 要不怎么一样的情况一样的措施，大多时候会有效的，有时候却硬是枉费心机、枉费力气、枉费劈柴煤油洋火呢？（同様の状況、同様の措置で、殆どの場合大丈夫なのに、時として力と石油を無駄にしてしまうこともあるのだから。）

例4 他们都是一样的人，一旦触怒了主人就不知道第二天怎样生活下去。（皆一樣に、いったん主人の怒りにでも触れようものなら、明日の生活はどうなるか分らないというような立場なのである。）

例5 有上初中的，有上小学的，有上幼稚园的；学校不同，年纪不同，长相不同，可是都一样的讨厌，特别是坐在车上，至老实的也比猴子多着两手儿。（中学、小学校、幼稚園と、学校も違えば年も違う、顔もさまざまだったが、うるさいことといったら似たりよったりで、ことにうしろに乗せているときなんかは猿のほうがましなくらいだった。）

上記の三例も【1a】の用例である。例3における“一样的情况一样的措施”は主語として使われ、例4の“一样的人”、例5の“一样的讨厌”は“是”の目的語として用いられる。三例における“一样”の日本語訳は、それぞれ「同様」「一樣」「似たり寄ったり」となる。

1.1.2 【1b】に当たる“一样”

今回の調査では、述語となる用例が124例あり、10.0%を占めている。辞書では、【1b】の例として“现在男女都一样了。”（今や男女は平等だ。）と挙げられている。次の例6と例7がそれである。

例6 我们先跟老乡借一些，借的次数多了自觉无理，就只好偷一些，反正一样，都不还。（最初のうちは村人から借りていたが、回数が増えるにつれてこれはよくないと思い、しかたなく少し盗んだが、いずれにしても返さないのだから同じことだった。）

例7 “一人一个，都一样的。不要争呵！”（「ひとりに一つだよ。どれも同じだよ。喧嘩するんじゃない」）

例6と例7の“一样”は、述語として用いられる用例であり、日本語の「同じだ」に翻訳された。また、【1b】に当たる“一样”の前に、以上のように、副詞の“反正”（例6），“都”（例7）を前に使う例が多く見られる。

今回の対訳データの調査では、下記の例8、例9のように、否定を表す副詞の“不”を使う用例が最も多いことが分かった。

例8 这种不同的原因，是他们追求、奔波的目标不一样。（この黒と白ほどの違いの原内は、追求し、奮闘する目標が違っているから。）

例9 他比哥哥略高一些，又显得单薄一些；脾气禀性很不一样。（彼は兄よりもやや上背があるが、幾分やせぎすである。気質は大分違う。）

例8、例9における“一样”は副詞の“不”をその前に使われる用例であり、それぞれの日本語訳は「違う」となる。また、例9の“很不一样”ように、“不”の前に、更に程度を表す副詞も使える。“很”のほか、今回の対訳データの調査では、“肯定”“就”を使う用例も見られる。

“是……的”で挟んで使われる用例も見られる。次の例がそれである。

例10 欣赏他的人说他好，讨厌他的人说他坏，他们在说明自己观点的时候，所举的例子却常常是一样的。（好きな人はよく言い、嫌いな人は悪く言うが、それを説明する段になると、挙げる例が同じということがしばしばである。）

例11 人之所好是一样的，难道你就不同吗？（誰でも好みは同じなものさ。君だってそうだろう？）

上記の二つの例における“是一样的”は述語として使われる。二例とも、「同じだ」と訳された。

上記の例以外に、「一致しているわけではない」などのように、意識となる用例もある。

1.1.3 【1c】に当たる“一样”

辞書では、【1c】の例として“这两根铁丝不一样粗”（この2本の鉄線は同じ太さではない）と挙げられている。今回の調査では、“不一样粗”のような“一样+形”の【1c】に当たる用例が10例しかなく、全体の1.0%を占めている。次の例11と例12がそれである。

例11 这就使我也一样不快活。(僕をも同様に不愉快にさせた。)

例12 好在苦惯了。而且什么人都是一样苦。(さいわいに苦しい生活にはなれている。
しかも、その苦しさは誰もが同じだ。)

上記の“一样不快活”“一样苦”は【1c】に当たる用例であり、“一样+形”が“不快活”“苦”の連用修飾語として用いられる。それぞれの日本語訳は「同様に」「同じだ」となる。

今回の対訳データでは、「同様に」「同じだ」のほか、次のように意識で対応される例も見られる。

例13 里面也用了一样潦草的字体，写着这样的话(なかには、これもなぐり書きの書体で、つぎのようなことが書かれてあった。)

1.1.4 【1d】に当たる“一样”

今回の調査では、動詞の前に用いられる例が15例あり、1.2%を占めている。辞書では、【1d】の例として“没座位站着一样看”(席がなくても立ったままで同じように見られる)と挙げられている。次の例14と例15がそれである。

例14 别的大夫也一样做的。(他のお医者さんでも同じように致しますよ。)

例15 第三代的领导也一样要取信于民，要干出实绩。(三代目の指導部も、同じようにに人民の信頼を得、実績をあげなければならない。)

例14と例15の“一样”は、それぞれ動詞の“做”、助動詞の“要”の前に用いられ、連用修飾語としての用例である。いずれも、日本語の「同じように」に翻訳された。

また辞書では、【1d】について「前で述べた状況の影響を受けないことを表す」と説明している。今回の調査でも、この特徴を裏付ける用例も見られた。次の例をみよう。

例16 饺子很鼓舞人，大家都变得勤快、大度、和气。月亮升起来，饺子熟了。男生聚在碾盘周围“唏哩呼噜”地吞；女生围住磨盘，吃态雅不了太多，终归噪音小些。大家都一样甩汗。(餃子は人の気持ちを元気づける。みんなまめまめしくなり、おおらかで、なごやかな雰囲気になった。月が空に懸かる頃、餃子ができあがった。男子は大型の挽臼の周りに集まってクチャクチャと食べ、女子は手回しの挽臼を取り囲み、大差ない食べっぷりだったが、さすがに音が少し静かではあった。みな一樣に汗を振り払いながら食べている。)

上記の例は餃子を食べるシーンである。“大家都一样甩汗”は、男女に関わらず、餃子

を大急ぎでがつつかきこんでいることを描いている。

今回の調査では、例14、例15の「同じように」、例16の「一様に」のほか、「同様に」と訳される用例や意識された用例も見られる。

1.1.5 【1e】に当たる“一样”

辞書では、【1e】の例として“我跟小田一样高”（私は田君と背の高さが同じだ）と挙げられている。今回の調査では、“跟小田一样高”のような“跟／和／同…一样”の【1e】に当たる用例が383例あり、全体の30.1%を占めている。次の三例がそれである。

例17 里面就夹着三份这样的东西——跟你的一样。（その中に三枚、こんなのがはいっていたわ——あなたと同じものよ。）

例18 她和以往一样，重重地把碗放在窗口台上。（彼女はいままでと同じように、トンブリを乱暴にカウンターの上に置く。）

例19 与他在书上看到的一样。（本に書かれている通りだ。）

例17の“跟你的一样”、例18の“和以往一样”、例19の“与他在书上看到的一样”は、いずれも【1e】に当たる用例であり、それぞれ「同じ」「同じように」「～通り」に訳された。

また、【1e】に当たる用い方であり、“跟／和／同…一样 + VP”の用例も見られる。次の例をみよう。

例20 他们都和我一样只看见院子里高墙上的四角的天空。（彼らは、私と同様、中庭の高い塀で仕切られた四角な空だけを見ているのだ。）

例21 年纪可是忘却了，总之是药店的柜台正和我一样高。（年齢は忘れてしまったが、とにかく薬屋の帳場は私とちょうど同じ高さで。）

上記の二つの例は“跟／和／同…一样”に例20は動詞の“看”、例21は形容詞の“高”が用いられる用例である。例20と例21における“一样”は、それぞれ「同様」「同じ」に訳される。

1.1.6 【2a】に当たる“一样”

今回の調査では、動詞の前に用いられる例が144例あり、11.3%を占めている。辞書では、【2a】の例として“下了一夜雪，校园里松树和柏树上堆满了梨花一样的积雪”（一晚雪が降って、校庭の松とコノテガシワにナシの花のような雪がいっぱいもった）と挙げられている。次の例22と例23がそれである。

例22 迈着骆驼一样的步伐往山上爬。（駱駝のような足取りで山を登った）

例23 闪电在云水之间划开，竟显出火一样的红色。(稲妻が雲と川のあいだを引き裂くように走り、その赤い色は火事のようだ。)

上記の例22における“骆驼一样的步伐”、例23の“火一样的红色”は“名+一样+的+名”という【2a】の用例である。例22は駱駝の足取りで山に登っている人たちの様子をたとえ、例23は火事の色を用い赤い色をたとえとする。いずれの日本語訳は「～のような／だ」となる。

1.1.7 【2b】に当たる“一样”

今回の調査では、動詞の前に用いられる例が最も多く、568例あり、44.6%を占めている。辞書では、【2b】の例として“像鲜血一样的颜色”(血のような色)、“他跑得真快，好像飞一样”(彼は飛ぶように速く走る)、“她把我们看做自己的亲儿女一样”(彼女は私たちを実の子のように思ってくれている)と挙げられている。次の例24と例25がそれである。

例24 那就象雪花一样洁白、晶莹。(降ったばかりの雪のように、つやつやと輝いておりました。)

例25 她进入院子和西屋，就像老鼠一样地没有被人察觉。(彼女はネズミみたいにチョット中庭から西の間へ滑りこんでいた。)

上記の例24における“象雪花一样洁白、晶莹”、例25の“像老鼠一样地没有被人察觉”における“一样”は【2b】に当たる用例である。それぞれ、日本語訳は「～のように」「～みたい」となる。

1.1.8 【一样是…可／却…】における“一样”

今回の調査では、上記の七つの用い方のほか、“一样”は【一样是…可／却…】に用いられる用例も見られる。

例26 “天天晚上，听着人家的小闺女都结着伴儿出去玩儿，可俺还得纺花绩线，一样是人，可看看俺是个啥样子？”(「よその女の子たちが毎晩、連れ立って遊びに行くのを聞きながら、わたしは糸を紡いでる。同じ人間なのに、わたしだけどうして？」)

例27 近了浅水湾，一样是土崖与丛林，却渐渐的明媚起来。(それでも浅水湾に近づくと、あいかわらず崖と密生林ながらもなんとなく華やかできた。)

例26における“一样是人”、例27の“一样是土崖与丛林”における“一样”は【一样是…可／却…】に用いられる用例である。例26の日本語訳は「同じ」となり、例27は「相変わらず」と訳された。

上記の例26、例27のように主語として使われるものを【1f】とする。対訳データの調査では、【1f】に当たる例が6例あり、0.5%を占めている。

今回の対訳データの調査では、中国語の原文における各使い方にあたる“一样”の用例数、及びそれらに対応する日本語訳を次の[図表4]のようにまとめられる。

[図表 4]

使い方	用例数	日本語訳
【1a】	30	同じだ／同様／一样／似たり寄ったり / どれも / どちらも
【1b】	124	同じだ／（否定の“不一样”）違う
【1c】	10	同じだ／同様に
【1d】	15	同じように／同様に／一样に
【1e】	387	同じだ／同様に
【1f】	6	同じだ／相変わらず
【2a】	144	～のような／だ
【2b】	568	～のように／～みたい

以上、対訳データを考察対象に、辞書の使い方の特徴を検証しながら考察してきた。その特徴を次のようにまとめられる。

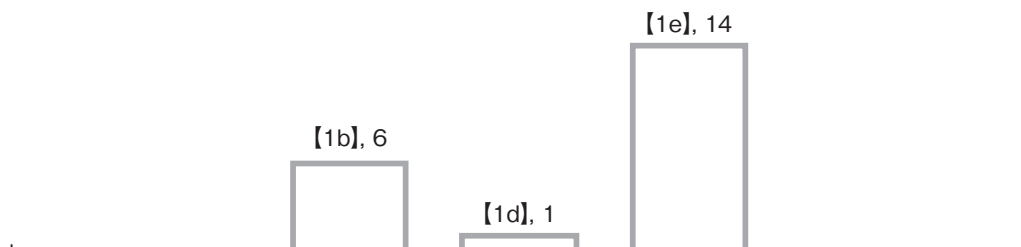
①中国語の原文における“一样”の実例と、その日本語訳を考察対象とし、前掲の[図表2]の「同じだ、違いがない」の【1a】～【1e】、「類似していることを表す」の【2a】【2b】を検証した。

②対訳データで調査した結果、「類似していることを表す」と「同じだ、違いがない」用例はそれぞれ708例、566例あり、「類似していることを表す」使い方が多いことが裏付けられた。

③【一样是…可／却…】における“一样”を【1f】（「同じだ、違いがない」）を提示し、補足した。

1.2 中国語の“一个样”の使い方及び日本語訳の特徴

辞書や文法の本では、“一个样”についての説明がなく、1.1に検証してまとめられた“一个样”の用法を参考しながら、中国語の原文における“一个样”を考察する。今回の対訳データの調査では、【1b】【1d】【1e】に当たる用法が見られる。各用法に当たる用例数は、下記の通りである。



〔図表 5〕

1.2.1 【1b】に当たる“一个样”

今回の調査では、述語となる用例が6例あり、28.6%を占めている。次の例28、例29がそれである。

例28 “我不论对谁，不论是哪一会儿，都一个样。”（私、どなたさんにも、どんな場合でも、使い分けはしないよ）

例29 “新砖旧砖垒上一个样，准省一半钱。”（「新らしいのも、古いのも積んじまえばおんなじで、しかも半値ですみますな」）

上記の“一个样”はいずれも【1b】に当たる用例である。例28における“一个样”の前に副詞の“都”が用いられる特徴も見られ、前掲した【1b】に当たる“一样”と同様である。また、例28の“一个样”は意識で「使い分けはしない」と訳され、例29の日本語訳は「同じだ」となる。

今回の対訳の調査では、【1b】に当たる6例とも肯定の用例であり、前掲した“不一样”のような否定の用例を見当たらなかった。【1b】の“一个样”は否定の用例があるか否か、次の節でさらに考察対象を拡大し検証する。

1.2.2 【1d】に当たる“一个样”

今回の調査では、動詞の前に用いられる例が1例しかない。次の例30をみよう。

例30 只要他不是地主反革命，都得一个样对待。（地主とか反革命でもねえかぎり、みんなおんなじに面倒みなけりゃなんねえ）

上記の例30は“对待”という動詞の前に“一个样”を使い、【1d】に当たる用例である。すこし違和感があるため、“一个样”は動詞の前に使うか否かは、コーパス⁸⁾による検証をした結果、該当する用例はなかった。

8) 北京語言大学「中国語 BCC コーパス」を参照。

1.2.3 【1e】に当たる“一个样”

今回の調査では、【1e】に当たる用例が14例あり、66.7%を占めている。次の例31、例32がそれである。

例31 我看当村的跟外村的一个样。(村の者でも余所の者でも同じだと思うな。)

例32 奇怪，他讲的，也和我在梦中听到的一个样。(あれ？彼の台詞まで夢と同じだ。)

例31の“当村的跟外村的一个样”、例32の“他讲的，也和我在梦中听到的一个样”は、いずれも【1e】に当たる用例であり、「同じ」に訳された。

前掲した【1e】に当たる“一样”と異なり、“跟／和／同…一个样+VP”の用例が見当たらなかった。“跟／和／同…一个样+VP”の用い方があるか否かは、コーパスで検証もしましたが、該当する用例はなかった。

冒頭で取り上げた【誤用例】をもう一度、考えてみよう。日本語の「彼ら二人は中国語をしゃべるのが同じようにうまい。」は中国語の“他们俩的汉语一样好”“他们俩的汉语说得一样好。”で対応できる。【誤用例②】は“跟／和／同…一个样+VP”の用い方がないことに当たるものである。

以上、対訳データを考察対象に、“一样”の用い方の特徴を参考しながら考察してきた。その特徴を次のようにまとめられる。

①中国語の原文における“一个样”の実例と、その日本語訳を考察対象とし、前掲の[図表2]の「同じだ、違いがない」の【1b】【1d】【1e】に当たる用い方が見られた。

②“一个样”の用い方について、次のような三点をさらに考察対象を拡大し検証する必要がある。

[検証点1] 【1b】の“一个样”は否定の用例があるか否か

[検証点2] “一个样”は動詞の前に使うか否か

[検証点3] “跟／和／同…一个样+VP”の用い方があるか否か

③[検証点2]と[検証点3]については、コーパス⁹⁾で検証したところ、該当する用例はなかった。

次の節では、中国語の“一样”と“一个样”の用い方を比較しながら、考察対象を拡大して検証することとする。

2. 中国語の“一样”と“一个样”の使用実態

再度、冒頭で取り上げた【誤用例】をもう一度、考えてみよう。日本語の「我々二人の意見はまったく異なる。」「彼ら二人は中国語をしゃべるのが同じようにうまい。」は中国

9) 北京語言大学「中国語BCCコーパス」を参照。

語の“我们俩的意见完全不一样”“我们俩的意见很不一样”、“他们俩的汉语一样好”“他们俩的汉语说得一样好。”で対応できる。【誤用例①】は【1b】の否定型に当たる用い方であり、【誤用例②】は“一个样”は形容詞の前に使われたものである。

2.1 “一样”と“一个样”についての使用意識調査

では“一样”と“一个样”について、学習者と母語話者の使用意識には差があるかを下記のように調査した。

【調査例】¹⁰⁾ 適切な訳を選びなさい。(複数回答可)

【原文】我々二人の意見はまったく異なる。

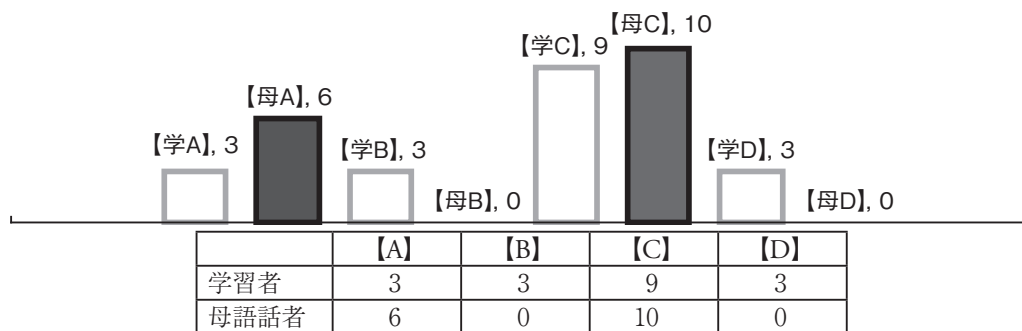
【A】我们俩的意见很不一样。

【B】我们俩的意见很不一个样。

【C】我们俩的意见完全不一样。

【D】我们俩的意见完全一个样。

調査の結果は次の[図表6]のようにまとめられる。



[図表6]

上記に示したように、学習者がAの“很不一样”を選ぶのは9人中3人しかいなかったが、10人の母語話者の内、6人がAを選択した。Cの“完全不一样”については、学習者も母語話者も全員選んだ。

BとDについては、母語話者は0であり、学習者はそれぞれ3人が選択した。

紙面の調査後、追加にインタビュー調査もした。

【BとDの“不一个样”について】

Bを選択した学習者の3人はDも選んだ。選ぶ理由について、「“一个样”については、

9) 学習者9人(日本語を母語とする、中国語専攻三年生3人、四年生6人)と中国語母語話者10人(学部生4人、社会人6人。
10人全員日本語N1以上、日本滞在歴10年以上。)

中国人の友達に“一样”と同じく『同じである、違いがない』という意味、と教えられたことがあるので、“一样”の否定は“不一样”なので、“一个样”の否定は“不一个样”とも言うのではないかと、3人は回答した。

それに対して、BとDを選択した母語話者は一人もいなかった。選ばない理由については、8名は「非文だから」と解答したが、2名の母語話者は「“不一个样”は使ったことがなかったが、使えないとは言えない。個人の判断とかを強く強調する場合、話し言葉で使ってもよい気がする。今の文脈で“不一个样”を使うと、かなり違和感があるので、選んでいなかった。」と答えた。

“不一个样”の用例について、コーパスで検証もしたが、BCCコーパスではなかったが、CCLコーパスでは1例しかなく、次の例33がそれである。

例33 据闻袁“大总统”不看别家报纸，专看日本人在北京办的《顺天时报》。但是，老袁所看的《顺天时报》，却和寻常人看的《顺天时报》不一个样。这是老袁左右的“秀才”特地为他单印的“殿版”，报喜而不报忧。

上記に示したように、“却和寻常人看的《顺天时报》不一个样”で強調を表す用例であるため、インタビュー調査の「強く強調する場合、“不一个样”も使える」ことが裏付けられた。(前掲の[検証点1])

[Cを選ぶ人はAより多い理由について]

Cの“完全不一样”を選ぶ人はAの“很不一样”を選ぶ人より多い、また学習者も母語話者も多かった。その理由について、Aを選んでなかった学習者の6人と母語話者の4人は「『まったく』は“很”ではなく、“完全”だと勉強したから」と答えたが、AとCの両方を選んだ3人の学習者は「“不一样”の前にさらに程度を表す副詞が使えると勉強した。“很”と“完全”の使い分けについては、あまり自信がなかったので、二つとも選んだ」と回答した。それに対して、両方を選んだ6人の母語話者は「文法から考えると、両方OKだが、実際にC“完全”を使うほうが多い」と答えた。

BCCコーパスで検証したところ、“完全不一样”の用例は242例あり、“很不一样”は108例ある。「“完全不一样”を使うほう“很不一样”が多い」ことが裏付けられた。

2.2 “一样”と“一个样”についての使用実態

前掲した対訳データの調査では、“一样”の用例は“一个样”より多く、60.67倍となることが分かった。では、“一样”は“一个样”より多く使用するかを検証するため、BCCコーパスを用い、調査した。その用例数は次の通りである。



上記に示したように、“一样”の用例数(85046例)は“一个样”(629例)の135.21倍で、“一样”の使用率は“一个样”より高いことが裏付けられた。

“一样”と“一个样”の用い方の特徴については、以上に基づいて次のようにまとめる。

[図表 8]

用い方	“一样”	“一个样”
【1a】	○	×
【1b】	○	○
△極めて少ないが、強く強調する場合、“不一个样”が使える		
【1c】	○	×
【1d】	○	×
【1e】	○	○
【1f】	○	×
【2a】	○	×
【2b】	○	×

(○＝該当する用い方がある ×＝該当する用い方がない △＝条件付き該当する用い方がある)

3. 終わりに

以上“一样”と“一个样”の用い方の特徴及び“一样”と“一个样”の違いについて考察してきた。その特徴は次のようにまとめられる。

- ①“一样”の使用率は“一个样”より高いことが裏付けられた。
- ②“一样”は前掲の[図表2]の「同じだ、違いがない」の【1a】～【1e】、「類似していることを表す」の【2a】【2b】を検証した。
- ③辞書では“一样”の用い方を参照し、“一个样”の用い方は、前掲の[図表2]の「同じだ、違いがない」の【1b】【1e】に当たる用い方が見られた。
- ④「強く強調する場合、“不一个样”も使える」ことが裏付けられた。
- ⑤「“完全不一样”を使うほう“很不一样”が多い」ことが裏付けられた。

参考文献

- (1) 呂叔湘編集、牛島徳次翻訳、菱沼透翻訳 (2003)『中国語文法用例辞典——「現代漢語八百詞 増訂本」日本語版』東方書店
- (2) 北京對外經濟貿易大学、小学館 (2002)『中日辞典』小学館
- (3) 中国社会科学院語言研究所詞典編集室 (2016)『現代汉语词典 (第7版)』商务印书馆
- (4) 李临定 主编 (2000)『現代汉语实用标词类词典』山西教育出版社
- (5) 劉月華、潘文娛など著 (2001)『実用現代漢語語法 増訂本』商務印書館
- (6) 劉子平 (2013)『漢語量詞大詞典』上海辞書出版社
- (7) 香坂順一 (2001)『現代中国語辞典』株式会社 光生館
- (8) 相原茂、荒川清秀、大川完三郎 (2004)『東方中国語辞典』東方書店 + 北京・商務印書館

例文の出典

- (1) 「中日対訳コーパス」(2003) 第1版 北京日本学研究中心
- (2) 北京語言大学「中国語 BCC コーパス」(<http://bcc.blcu.edu.cn>)
- (3) 北京大学中国語言学研究中心「CCL コーパス」(<http://ccl.pku.edu.cn>)



執筆者紹介

王 楽 京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻(言語文化コース)
東アジア地域

大井 一真 京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻(言語文化コース)
英米地域

柏木 あい 京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻(実践言語教育コース)
日本語教育地域

福島 剛司 京都外国語大学大学院 博士後期課程 異言語・文化専攻言語文化領域

山口 裕太 京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻(言語文化コース)
ヨーロッパ・ラテンアメリカ地域

吉野 孝介 京都外国語大学大学院 博士後期課程 異言語・文化専攻 言語文化領域



編集代表

彭 飛

(京都外国語大学 大学院外国語研究科長 日本語学科教授)

編集委員会

郝 義雨

(京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻(言語文化コース) 東アジア地域)

中井 明

(京都外国語大学大学院 博士前期課程 異言語・文化専攻(言語文化コース) 東アジア地域)

編集後記

2007年創刊以来、大学院紀要『言語と文化』は今年で第15号を迎えました。コロナ禍で大変な時期に投稿していただいた方々には感謝申し上げます。今回は日本語教育、日中対照言語学、日英対照言語学など、さまざまな研究分野を扱う論文が掲載され、本学大学院院生の研究成果を報告することができました。

本号刊行にあたり、ご多忙の折に査読していただいた先生方、編集作業や印刷・製本をご担当いただいた多くの方々に心より感謝申し上げます。おかげで本号を刊行することができました。本紀要の編集は毎号、院生主体で行っておりますので、まだまだ改善すべき点も多く、今号の反省点は次号刊行における課題として反映させたいと考えております。

また、本紀要『言語と文化』が、多くの方にご覧いただけますことを心より願っております。

(郝 義雨／中井 明)

『言語と文化』原稿執筆要項

1. 執筆資格

本学在籍中の大学院生、および編集委員会が認めたものとする。

2. 原稿の種類

論文、研究ノート、書評、翻訳およびその他、編集委員会が認めたものとする。

3. 原稿の枚数

論文は38字×32行を1ページとして以下の分量を目安とする。

- 1) 論文：約12,000字（A4で10頁程度、上限はA4で14頁とする）。
研究ノート：約8,000字（A4で7頁程度、上限はA4で8頁とする）。
翻訳：約12,000字（A4で10頁程度、上限はA4で10頁とする）。
書評：約2,000～2,800字（A4で1～2頁程度、上限はA4で2頁とする）。
- 2) 欧文原稿の目安は論文10頁5,000語程度、研究ノート7頁3,000語程度とする。
- 3) 論文の初めに要旨をつけること。要旨の分量は日本語・中国語の場合は800字まで、その他の欧米語の場合は1,600字までとする。また、タイトルは、目次ページに記載する際使用言語に関わらず欧文和文両方を必要とする。
- 4) 要旨と図表などは上記1)の枚数に含まれるものとする。

4. 執筆の手続き

- 2021年7月23日(金)までに執筆申込書を編集委員会宛に提出する。執筆申込なしに送付された原稿は受理されない。ただし、執筆者が海外在住の場合、執筆者が指導教官に申込書を提出し、指導教官が申込書を提出してもよい。
- 2021年10月24日(日)までに執筆者は担当教官に原稿を予備提出し、指導を受けておく。
- 2021年11月7日(日)までに編集委員会に完成原稿を提出する。

5. 原稿の作成と提出

原稿は、編集委員指定の本要項を参照して作成し、表記等の校正作業については編集委員会に一任していただく。プリントアウトした原稿を1部とデータの書き込まれたメディアを提出する。データはメール送信(g_bunka@kufs.ac.jp)または郵送も可。

データの郵送先：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

京都外国語大学大学院外国語学研究科『言語と文化』編集委員会

原稿は完全原稿を提出すること。締切日を過ぎた原稿は受け付けない。

6. 校正

執筆者校正は原則として2回までとし、文章の大幅な加筆・修正は認めない。

7. 原稿の採否

編集委員会によって決定される。

8. 原稿の掲載

当該号の投稿論文数、その他の事情により、次号に繰り越す場合がある。

その場合、編集委員会は投稿者に連絡し、協議するものとする。

9. 執筆申込先および原稿送付先

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学大学院事務室

『言語と文化』編集委員会 e-mail: g_bunka@kufs.ac.jp

10. その他

必要な事項については、編集委員会の議を経て決定する。

11. 著作権について

掲載原稿の著作権は、著者に帰属する。ただし、編集委員会は、掲載原稿を電子化し、公開・配布するための権利を有するものとする。

京都外国語大学『言語と文化』第15号

2021年3月15日 印刷

2021年3月15日 発行

編集兼 京都外国語大学大学院外国語学研究科
発行所 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6